

佐賀市文化財調査報告書第26集

村 徳 永 遺 跡

(A・B地区)

平成元年3月

佐賀市教育委員会

佐賀市文化財調査報告書第26集

村 徳 永 遺 跡

(A・B地区)

平成元年3月

佐賀市教育委員会

発刊にあたって

この報告書は、農業基盤整備事業の施工に先がけて、佐賀市教育委員会が国庫補助を受けて昭和63年度に発掘調査を実施した村徳永遺跡（A地区・B地区）の発掘調査報告書であります。

今回、調査を行いました村徳永遺跡は、平安時代から鎌倉、室町時代にかけての遺跡であり、掘立柱建物跡・土壇・井戸・溝などの遺構や土師器・瓦器・黒色土器・輸入陶磁器などの遺物が検出されました。

これらの資料は、佐賀市における古代から中世の生活を知る上で欠かすことのできない貴重なものであり、この発掘報告書とともに、郷土の文化財に対する認識と理解に役立てば幸甚に存じます。

なお、調査に際しまして、御協力いただきました佐賀県農林部、佐賀県教育委員会、ならびに地元の方々に対し、厚く御礼申し上げます。

平成元年 3 月31日

佐賀市教育委員会
教育長 山 田 清 人

例 言

1. 本書は、農業基盤整備事業に伴い、昭和63年度に発掘調査を実施した村徳永遺跡(A・B地区)の調査報告書である。
2. 調査は、国庫補助を受けて佐賀市教育委員会が実施した。
3. 遺構の実測は調査員と川上晶子・川崎真須美・小柳恵子・副島カスミ・角田絹子・友添丸子・原京子・龍由美子が、遺構・遺物の写真撮影は調査員が行った。
4. 出土遺物の接合・復元作業は鬼崎玲子が、実測・製図作業は島京子・木島慎治が、佐賀市教育委員会文化財収蔵庫において行った。
5. 本書の執筆・編集は木島慎治が担当した。
6. 出土遺物及び実測図は、佐賀市高木町15番30号、佐賀市教育委員会文化財収蔵庫に保管している。

凡 例

1. 遺構については、調査区ごとに一連番号を付し、それぞれ番号の前にSB：掘立柱建物跡、SD：溝、SE：井戸、SK：土壇、SP：土壇墓、SX：不明遺構、P：柱穴・小穴、の分類記号を付した。
2. 遺構の法量はm単位、遺物の法量はcm単位を原則として用いた。
3. 挿図・本文中に用いた方位はすべて座標北である。
4. 遺物実測図の中心線が一点破線となっているものは反転復元を表わす。
5. この遺跡の略号はMTNで、地区ごとにMTN-A、MTN-Bと表記する。

本文目次

I. 序 説	1
(1) 調査にいたる経過	1
(2) 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	1
(1) 地理的環境	1
(2) 歴史的環境	3
III. 遺跡の概要	3
IV. 遺構と遺物	4
A地区の遺構	4
(1) 井戸	4
(2) 土壌	4
(3) 溝	7
A地区の遺物	7
B地区の遺構	11
(1) 井戸	11
(2) 土壌	12
(3) 土壌墓	19
(4) 掘立柱建物跡	19
(5) 溝	19
B地区の遺物	23
V. 小 結	33

插图目次

Fig. 1 村徳永遺跡周辺遺跡分布図	2
Fig. 2 村徳永遺跡調査区配置図	3
Fig. 3 A地区 SE011実測図	4
Fig. 4 A地区 SE028実測図	5
Fig. 5 A地区 SE029実測図	6
Fig. 6 A地区 SK017実測図	6
Fig. 7 A地区 SK018実測図	6
Fig. 8 A地区 SK037実測図	6

Fig. 9	A地区 SD015出土遺物実測図	7
Fig. 10	A地区 SK017、018、SE028出土遺物実測図	8
Fig. 11	A地区 SE029出土遺物実測図	9
Fig. 12	A地区 SK037出土遺物実測図	10
Fig. 13	A地区その他出土遺物実測図	10
Fig. 14	B地区 SE014実測図	11
Fig. 15	B地区 SE033実測図	12
Fig. 16	B地区 SE034実測図	13
Fig. 17	B地区 SK003実測図	13
Fig. 18	B地区 SK004実測図	13
Fig. 19	B地区 SK010実測図	13
Fig. 20	B地区 SK011、042実測図	14
Fig. 21	B地区 SK012実測図	14
Fig. 22	B地区 SK013実測図	15
Fig. 23	B地区 SK018実測図	15
Fig. 24	B地区 SK019実測図	16
Fig. 25	B地区 SK021実測図	16
Fig. 26	B地区 SK022実測図	16
Fig. 27	B地区 SK025実測図	16
Fig. 28	B地区 SK026実測図	17
Fig. 29	B地区 SK027実測図	17
Fig. 30	B地区 SK031実測図	18
Fig. 31	B地区 SK040実測図	18
Fig. 32	B地区 SP009実測図	19
Fig. 33	B地区 SB020掘立柱建物跡実測図	20
Fig. 34	B地区 SB029掘立柱建物跡実測図	21
Fig. 35	B地区 SB041掘立柱建物跡実測図	22
Fig. 36	B地区 SB043掘立柱建物跡実測図	23
Fig. 37	B地区 SD001、002出土遺物実測図	24
Fig. 38	B地区 SD002出土遺物実測図	25
Fig. 39	B地区 SK003・006、SP009、SK011・012・013出土遺物実測図	26
Fig. 40	B地区 SE014、SK018・019・021出土遺物実測図	27
Fig. 41	B地区 SK025出土遺物実測図	28
Fig. 42	B地区 SK026出土遺物実測図	29

Fig. 43	B地区 SK027出土遺物実測図	30
Fig. 44	B地区 SK031、SE033出土遺物実測図	31
Fig. 45	B地区 SD036、SK040出土遺物実測図	31
Fig. 46	B地区 SE034出土遺物実測図	32
Fig. 47	村徳永遺跡A地区遺構配置図	35
Fig. 48	村徳永遺跡B地区遺構配置図	36

I 序 説

(1) 調査に至る経過

久保泉西部地区における昭和63年度農業基盤整備事業は18haについて工事計画がなされた。これに伴い、昭和62年11月に当該地区の確認調査を実施した結果、遺跡の存在が確認された。この調査結果を基に、県農林部、県文化課、佐賀市土地改良課、佐賀市教育委員会の四者で協議を行った結果、地下げにより削平を受ける部分1,700㎡について国庫補助事業による発掘調査を実施し、記録保存を図ることになった。

調査区は便宜的にA地区・B地区に分け、発掘調査は昭和63年9月21日から開始し、昭和63年11月17日に現場作業を終了した。出土した遺物の整理作業、報告書作成作業は佐賀市教育委員会文化財収蔵庫で実施した。

(2) 調査の組織

調査主体 佐賀市教育委員会

事務局 佐賀市教育委員会 社会教育課

参事兼課長 山口喜代治

課長補佐兼文化係長 中野和彦

事務吏員 甲木亮一（庶務担当）

福田義彦（調査担当）

木島慎治（調査担当）

発掘作業員 大野ユキエ・緒方多美子・緒方 敏子・亀川すみえ・木塚 康子

小出 香澄・後藤美智江・小林 澄子・成富 壽子・畑瀬 弘

原 ケサ代・原 ツル・原 ナミ子・原 ミチエ・廣瀬八重子

松林 初代・松本ツル子・宮地 富子・宮地 峰子・武藤ツル代

森田ツル代・山木江美子・山本 初代

調査協力 佐賀県教育委員会・佐賀県農林部・中部農林事務所・佐賀市土地改良課・久保泉土地改良区・山豊建設株式会社・新九州測量設計株式会社・双建航業株式会社・地元各位

II. 遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

佐賀市は佐賀県東南部に位置し、東は神崎・千代田・諸富町、西は大和・三日月町、北は大和町と接している。市の北部には脊振山系が東西に連なり、その南麓には舌状丘陵が形成され、沖積平野が南へ広がっている。

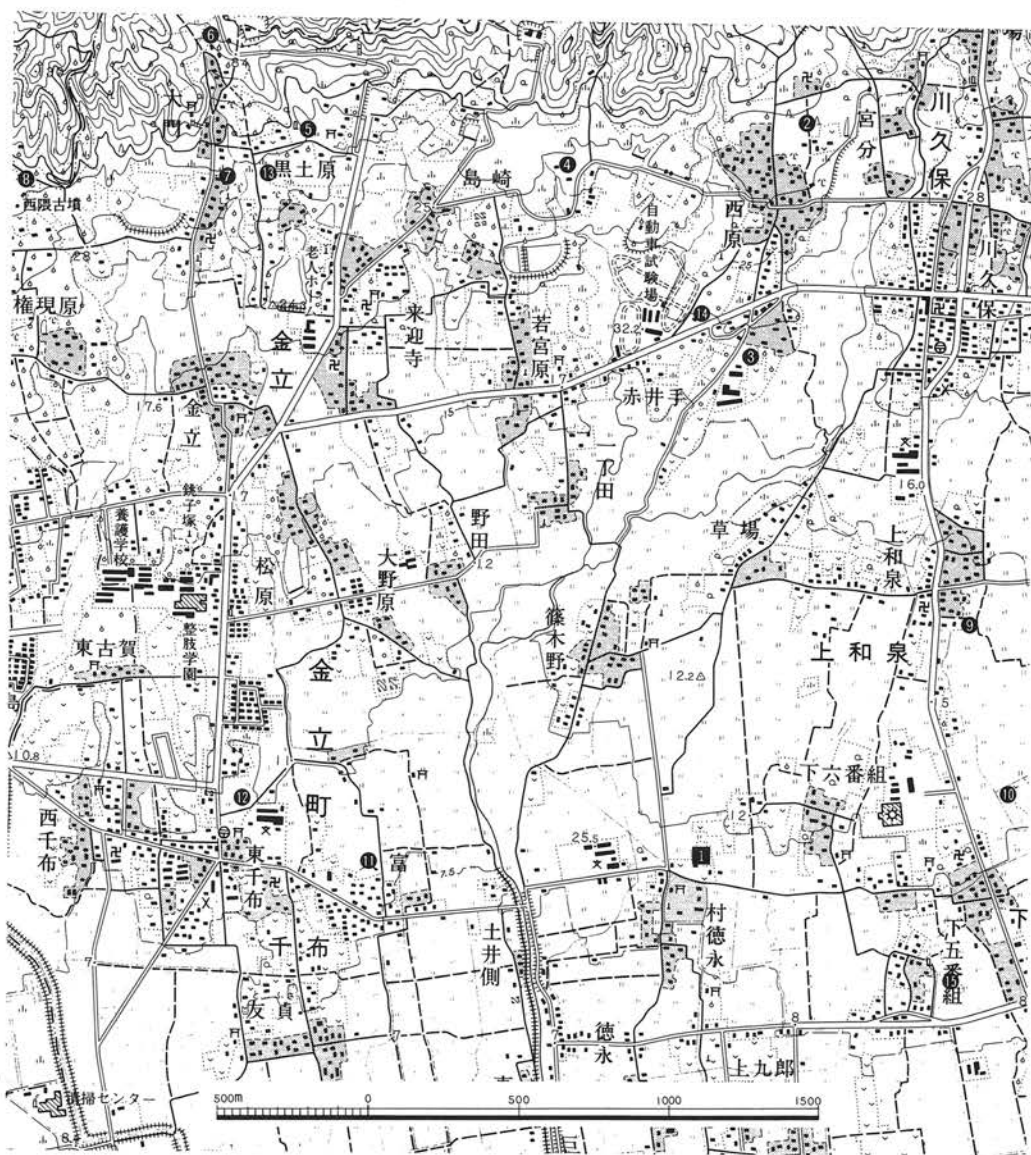


Fig. 1 村徳永遺跡周辺遺跡分布図

- | | | | |
|---------|----------|---------|-----------|
| ① 村徳永遺跡 | ② 西原古墳群 | ③ 琵琶原遺跡 | ④ 久保泉丸山遺跡 |
| ⑤ 黒土原遺跡 | ⑥ 大門古墳群 | ⑦ 大門遺跡 | ⑧ 西隈古墳 |
| ⑨ 上和泉遺跡 | ⑩ 泉三本栗遺跡 | ⑪ 久富遺跡 | ⑫ 東千布遺跡 |
| ⑬ 金立古墳群 | ⑭ 大日遺跡 | ⑮ 立野遺跡 | |

今回調査を行った久保泉地区は、脊振山系南麓に位置し、広大な水田が広がった地区である。元来は多くが低丘陵をなしていたと思われ、水田化の際の削平をまぬがれた部分が現在、独立低丘陵として存在しているようである。

村徳永遺跡は、標高 8 m 程度のこのような低丘陵に位置していた。

(2) 歴史的環境

佐賀市内には、数多くの遺跡が存在するが、特に山麓部一帯及びそこから広がる平野部における遺跡の分布密度は非常に高い。

縄文時代の遺跡として、前・後・晩期の土器を出土した大門遺跡、晩期支石墓をもつ久保泉丸山遺跡などがあるが、調査例は少ない。弥生時代では、甕棺墓群を検出した東千布遺跡、50基以上の住居跡を検出した琵琶原遺跡や、久富遺跡、立野遺跡等がある。また、久保泉町^{いち}櫟の木では銅戈溶范が見つかった。古墳時代に入ると、脊振南麓は古墳群の中心地をなしており、幾何学文が線刻された家形石棺をもつ西隈古墳、移設保存された久保泉丸山遺跡、黒土原遺跡、大門古墳群、金立古墳群、西原古墳群等数多くの古墳が存在している。墳墓以外では、琵琶原遺跡、泉三本栗遺跡で住居跡が検出され、その他、帯隈山神籠石等が存在するが、墳墓以外の調査例は非常に少ない。歴史時代のものは他時代に比べ調査確認例は少なく、古代では大日遺跡、上和泉遺跡、中世では蓮池上天神遺跡等の調査が行われているにすぎない。

III. 遺 跡 の 概 要

村徳永遺跡は佐賀県佐賀市久保泉町大字上和泉字徳永に所在する。便宜的に地区設定を行い、A・B地区について発掘調査を実施した。

調査の結果、溝15条、土壇49基、井戸8基、土壇墓1基、掘立柱建物跡5棟などを検出した。遺物は土師器・瓦器を中心に出土しており、時期は平安時代から中世にわたっている。



Fig. 2 村徳永遺跡調査区配置図 (S = 1/1000)

IV. 遺構と遺物

今回の発掘調査では、遺跡の概要で述べたように、溝・土坑・井戸・掘立柱建物跡等の遺構や平安時代～中世の遺物を検出した。すべてのものについて報告できないため、特徴的なものを抽出し、各地区ごとに述べることにする。

A地区の遺構

(1)井戸

S E011 (Fig. 3) 調査区南西部に位置する。平面形は直径約2mの不整形円形を呈し、深さ0.95mを測る。上部は溝(S D013・S D014)に切られてる。

S E028 (Fig. 4) 調査区北東部に位置し、平面形は長径3.6m、短径約3.4mの楕円形を呈する。深さ約1.5mを測る。比較的大型のものだが、出土遺物は比較的少なかった。底付近より木片を検出している。

S E029 (Fig. 5) 調査区南東部に位置する。平面形は直径約2.3mの不整形円形を呈す。深さ約1.2mを測る。遺物の出土量は比較的多かった。

(2)土坑

S K017 (Fig. 6) 調査区北西部に位置し、S D014を切っている。平面形は径約1mの円形を呈し、深さ約1mを測る。

S K018 (Fig. 7) 調査区北西部に位置する。約半分を検出しており、他は調査区外にある。平面形は隅丸長方形を呈すと思われる、深さは約1.2mを測る。土層は人為的な堆積状況を呈しており、S K019とともに土坑墓の可能性がある。

S K037 (Fig. 8) 調査区中央部付近に位置する。平面形は長径1.7m、短径1.15mの楕円形を呈する。深さは0.75mを測り、断面は逆台形状である。

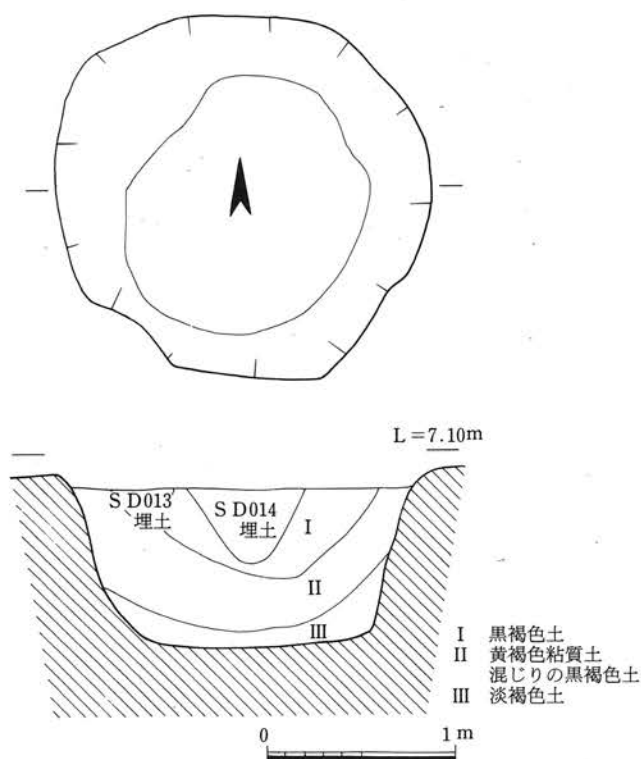


Fig. 3 S E011実測図 (S = $\frac{1}{40}$)

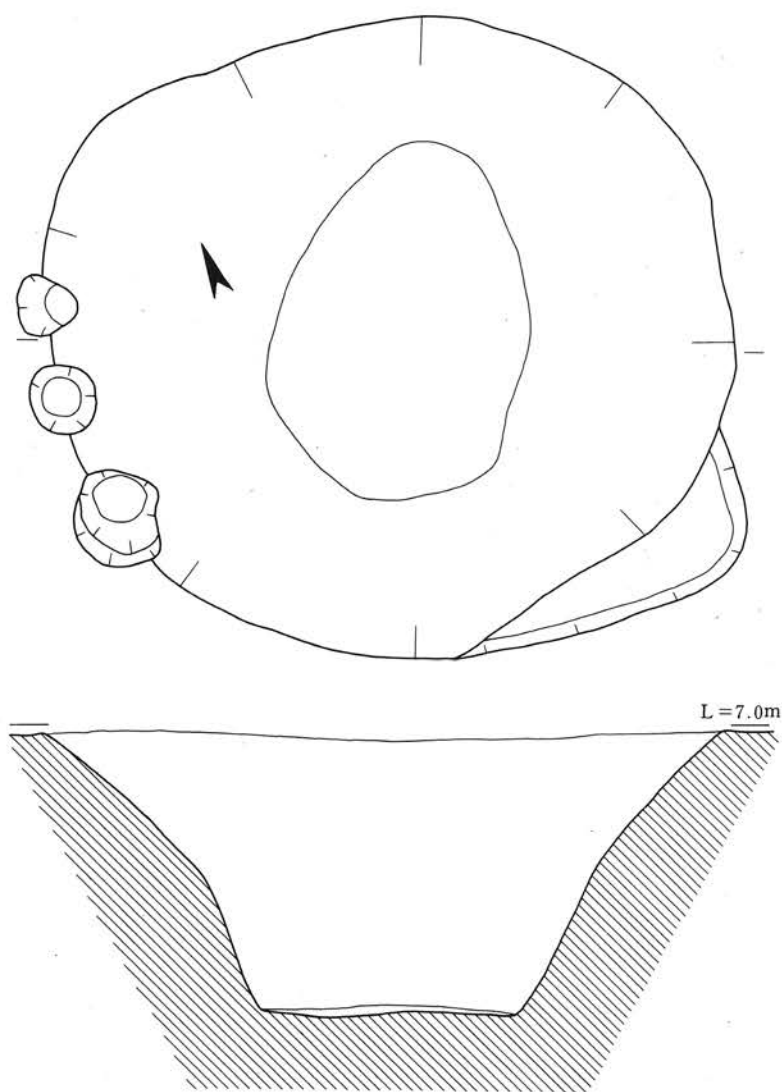
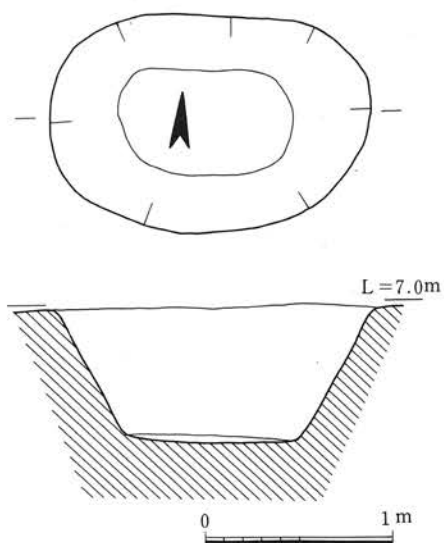
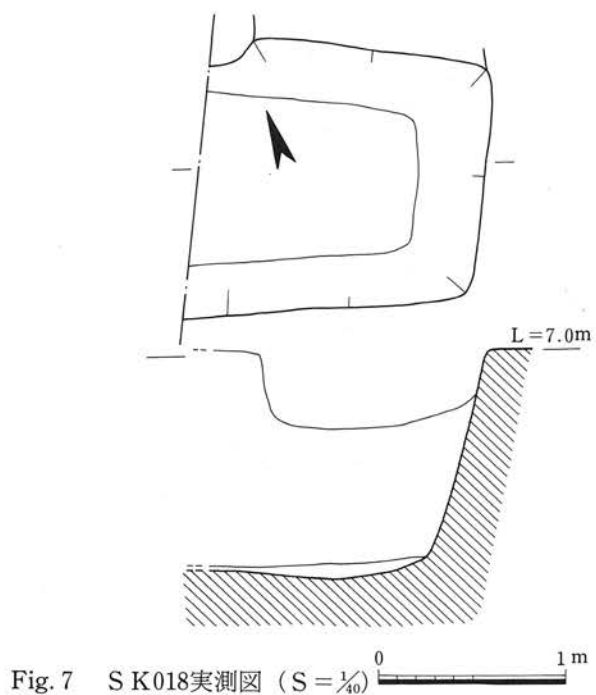
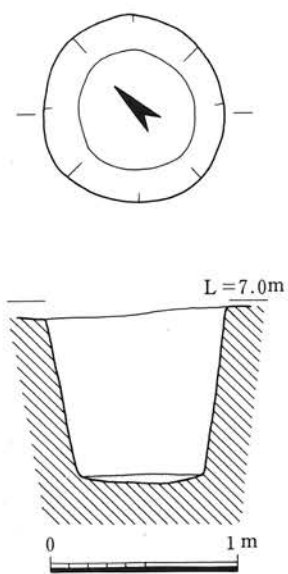
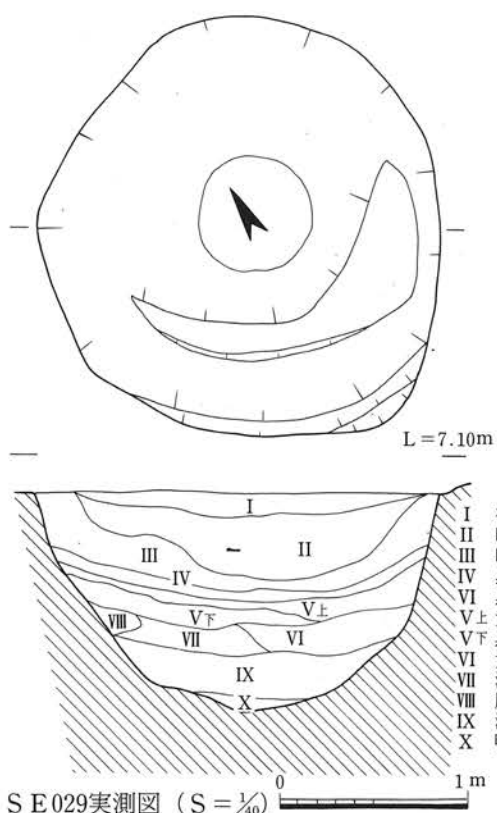


Fig. 4 SE028実測図 ($S = \frac{1}{40}$)

0 1 m



(3)溝

S D001 (Fig. 47) 調査区を南北に走る最も大きい溝である。遺物は細片で図化し得なかったが、B地区のS D001・S D002と同様の遺物を出土しており、位置的にみてもB地区の溝とつながると思われる。

S D015 (Fig. 48) 調査区中央を東西に走る溝で、S D014・S D001に切られている。幅1～1.5m、深さ0.2～0.4mを測る。断面は扁平なU字状を呈する。

A地区の遺物

S D015出土遺物 (Fig. 9, 1～11)

土師器小皿 (1～3) 口径7.9～8.9cm、器高1.3～1.4cmを測る。1はヘラ切り、2・3は糸切りである。ともに、内底にナデ調整、外底に板状圧痕を残す。

土師器坏 (4～6) 復元口径・器高は4が14cm・3cm、5が16.8cm・3.5cm、6が15.4cm・4.4cmを測る。4はヘラ切りで外底に板状圧痕を残すが他のものは不明。6は破片であるため器形が明確でなく埴の可能性もある。

土師器埴 (7) 復元口径15.6cm、器高5.7cmを測る。体部内外面には横ナデ、底部内外面にはナデが施される。

瓦器埴 (8・9) 8は復元口径17cm、器高5.5cmを測る。器面の磨耗が激しく調整は不明瞭

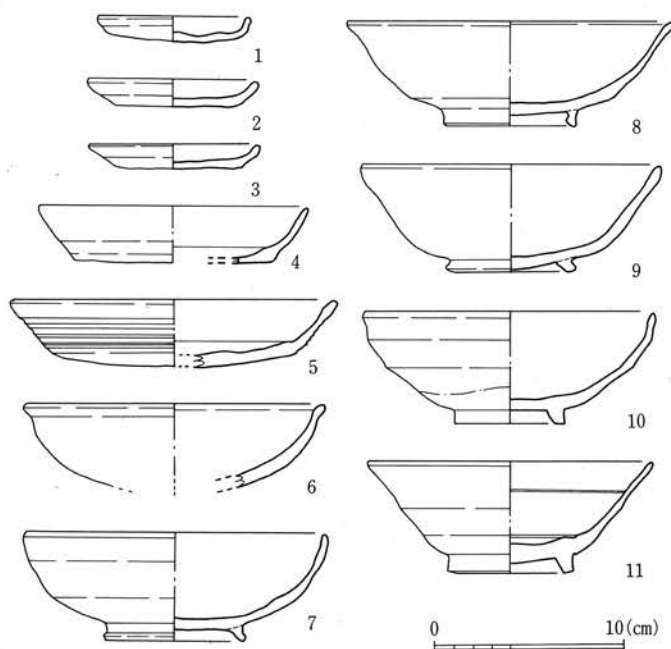


Fig. 9 A地区S D015出土遺物実測図 (S = $\frac{1}{4}$)

だが外底には回転ヘラ削りが施される。また高台内には「X」字状のヘラ記号がある。暗灰色を呈する。9は復元口径15.4cm、器高5.7cmを測る。磨耗激しく調整不明。明白黄色を呈する。

白磁碗 (10・11) 10は復元口径15.1cm、器高5.9cmを測る。施釉はうすく高台付近にまでは及ばない。暗黄褐色を呈する。11は復元口径15cm、器高5.9cmを測る。体部内面には一条の沈線を施し、内面見込みは段が削り出されている。高台付近まで施釉され、緑がかった白色を呈する。

S K017出土遺物 (Fig. 10、12～15)

土師器坏 (12) 糸切り底で、復元口径11.2cm、器高3.9cmを測る。内底は黒く焼けている。

鉢 (13) 小破片であり全体器形は不明。二条の突帯間に手描きの同心七角形の文様が並べられている。内面は横方向のハケ目を行っている。

摺鉢 (14) 外面にはナデ調整、内面は横方向のハケ目の後に4条1単位の櫛目が入る。

鍋 (15) 復元口径37.2cmを削る。胴部からゆるやかに屈曲し口縁部に至る。外面は屈曲部より上はナデ、下はハケ目を行う。内面は横方向のハケ目を行っている。また外面下部には煤の付着が著しい。

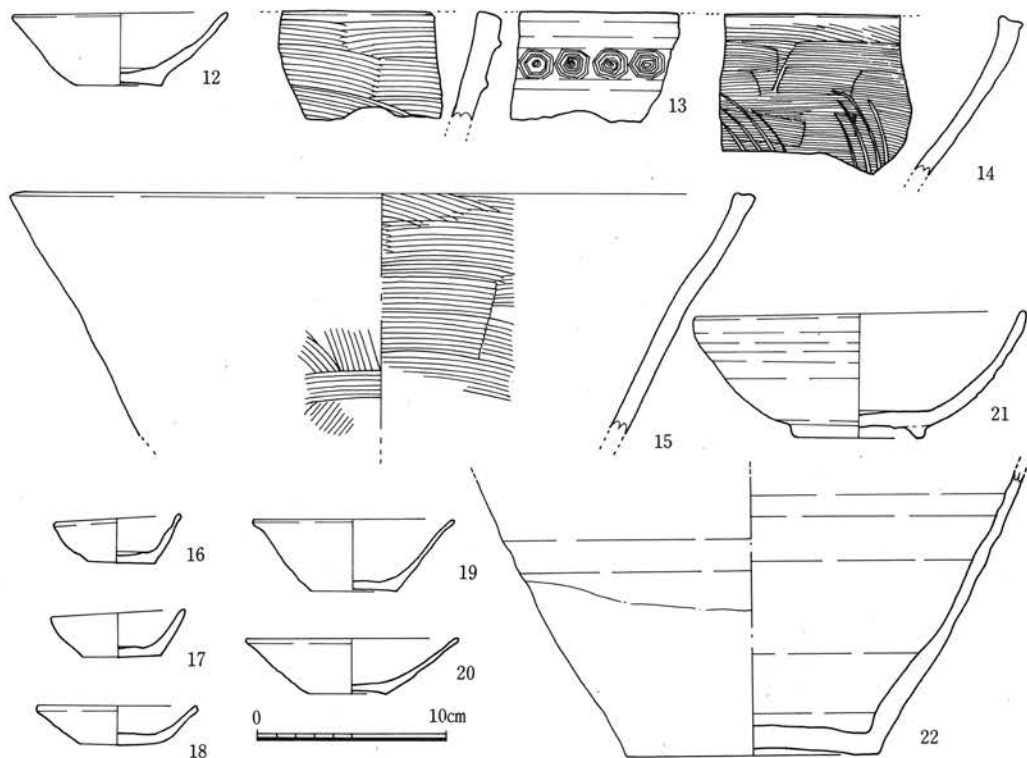


Fig.10 A地区S K017、S K018、S E028出土遺物実測図 (S = 1/4)

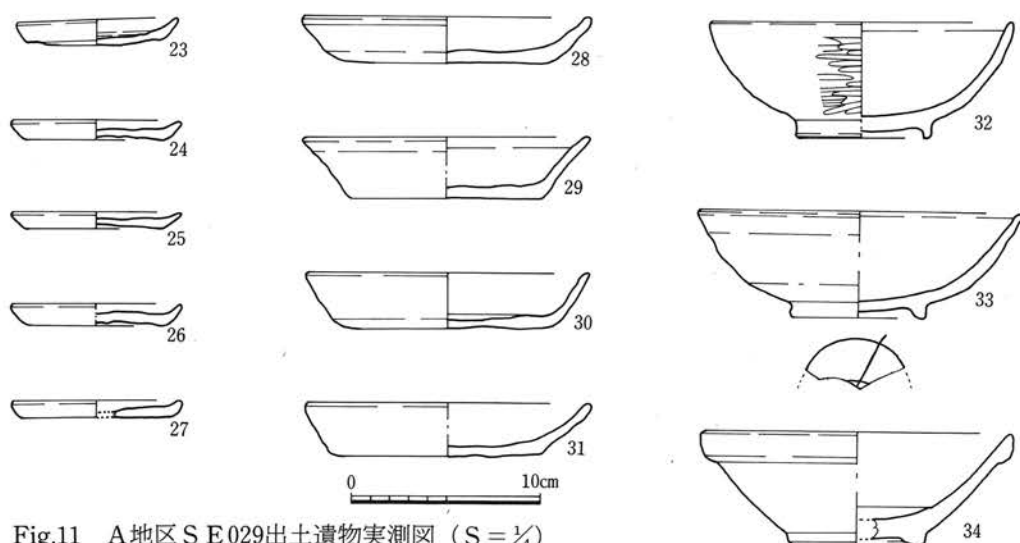


Fig.11 A地区 S E 029出土遺物実測図 (S = $\frac{1}{4}$)

S K 018出土遺物 (Fig. 10、16～20)

土師器小皿 (16～18) 口径6.5～8.4cm、器高2.1～2.6cmを測る。すべて糸切り底である。

土師器杯 (19・20) 口径・器高は19が10.5cm・3.9cm、20が11.2cm・2.9cmを測る。2点とも糸切り底である。

S E 028出土遺物 (Fig. 10、21・22)

瓦器碗 (21) 復元口径17.2cm、器高6.8cmを測る。器面調整は磨滅により不明瞭である。

壺 (22) 底部から胴部にかけて残存する。底部径は13.1cmを測る。胎土は黄灰色を呈し、比較的良好である。外器面上半部には暗褐色から灰褐色の釉がかけられている。内器面には施釉されていない。

S E 029出土遺物 (Fig. 11、23～34)

土師器小皿 (23～27) 23はヘラ切り、他は糸切りである。23は口径8.4cm、器高1.5cm、24～27は口径8.8cm、器高0.9～1.1cmを測る。内底にはナデ調整を行い、外底には板状圧痕を残す。

土師器杯 (28～31) 復元口径14.8～15.6cm、器高は2.5～3.3cmを測る。すべて糸切りで、内底にはナデ調整を行う。30は器面があれており不明だが、他は外底に板状圧痕を残す。

瓦器碗 (32・33) 32は口径15.8cm、器高6.1cmを測る。外面はヘラミガキを行い、内面も不明瞭だがヘラミガキを行っているようである。明灰色を呈する。33は復元口径17cm、器高5.7cmを測る。器面があれており調整は不明である。高台内にヘラ記号が残る。

白磁碗 (34)、復元口径16cm、器高6.6cmを測る。口縁部は玉縁にしており、外面施釉は高台部

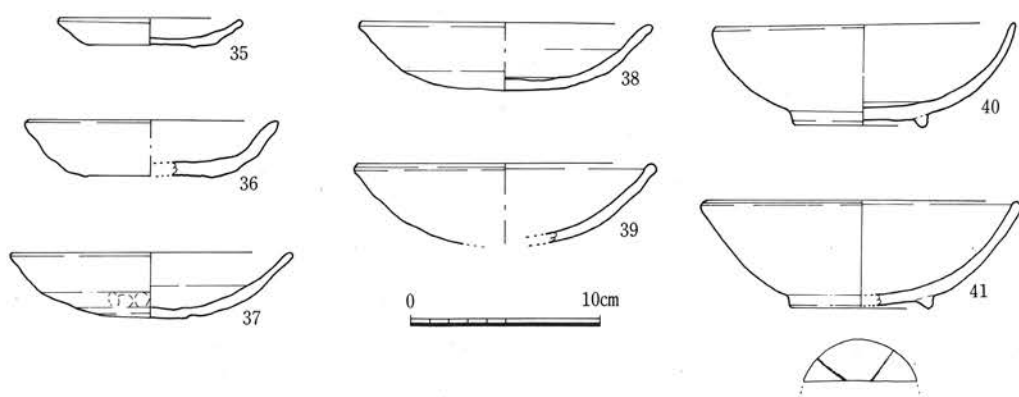


Fig.12 A地区 S K037出土遺物実測図 (S = $\frac{1}{4}$)

には及んでいない。胎土は白色で、釉は白色に近い薄緑色を呈する。

S K037出土遺物 (Fig. 12、35～41)

土師器小皿 (35) 口径9.4cm、器高1.4cmを測る。ヘラ切りで内底にはナデを行うが板状圧痕はない。

土師器杯 (36～39) 口径13.2～15.5cm、器高3～3.6cmを測る。すべてヘラ切りである。体部は横ナデ、内底はナデが施され、外底には板状圧痕を有する。明黄褐色～褐色を呈し、焼成は良い。

土師器碗 (40・41) 40は口径15.8cm、器高5.6cmを測る。体部下半にはヘラ削りの後にナデ、他は横ナデを行っている。明黄褐色を呈する。41は復元口径16.4cm、器高5.7cmを測る。調整は40と同様である。部分的に瓦器様の色調を呈する。また、40、41は底部に同様のヘラ記号を有する。

その他のA地区出土遺物 (Fig. 13、42～54)

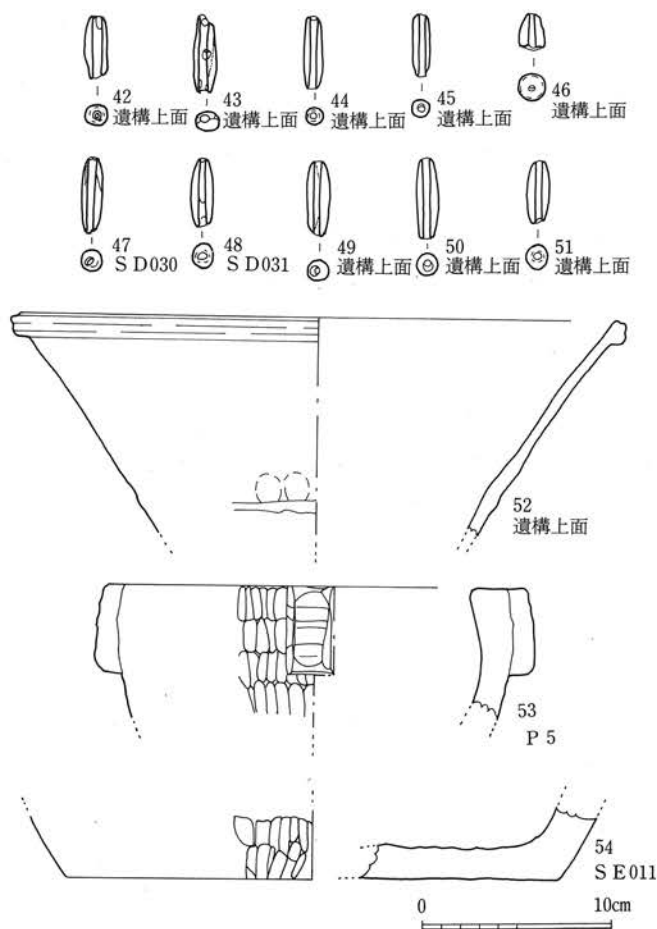


Fig.13 A地区その他出土遺物実測図 (S = $\frac{1}{4}$)

土鍾 (42~51) 管状を呈し、長さ2.1~4.4cm、最大径0.9~1.4cm、孔径0.3~0.5cmを測る。
 鉢 (52) 復元口径31.4cmを測る。胎土は1~2mmの砂粒を多く含む。調整は不明瞭であり器面に煤等の付着はみられない。

石鍋 (53・54) 12は把手をもち、体部の削り痕が明瞭である。なお、胴部下方の割れ口にも削り痕が残っており、転用品の可能性はある。13は底部片で外底には煤の付着がみられる。

B地区の遺構

(1)井戸

B地区において、確実に井戸と考えられたものは3基であり、その中で2基は非常に特徴をもつものである。

S E 014 (Fig. 14)

調査区中央付近に位置する。平面形は長径約1.5m、短径約1.3mの不整形円形を呈し、断面形は二段掘りの様相を呈しており、深さは約1.3mを測る。なお、井戸掘り方の周囲に一段浅い不整長方形の掘り込みがあり、南西隅でS X 027とつながる。深さは0.1mと浅い。明確な遺構と認定しがたく、井戸に伴うものであると断定できないが、ここではS E 014として取扱っておく。

S E 033 (Fig. 15)

調査区中央付近に位置する。他の遺構に切られているが、平面形は長径約2.3m、短径約2mの長楕円形を呈すると思われる。深さは約1.3mである。基本的には二段掘りであるが、東部は小さな段をつけており、階段状の掘り方を呈している。

S E 034 (Fig. 16)

S E 033の北西部に位置する。平面形は径約1mの円形を呈し、深さは約1.3mを測る。底からは木製井戸杵を検出した。遺構内部からは握拳大から人頭大の礫が大量に

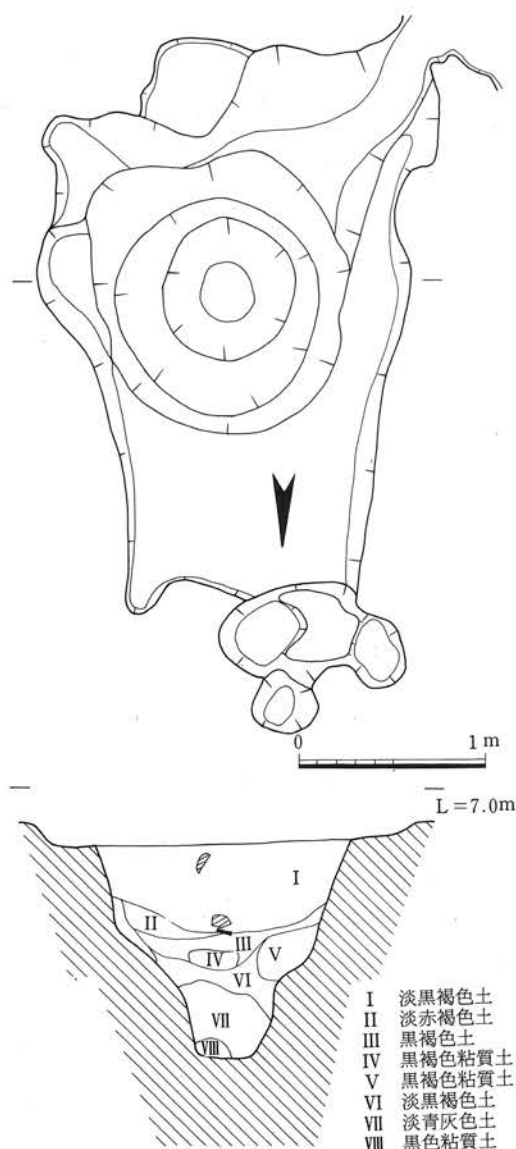


Fig.14 S E 014実測図 (S = 1/40)

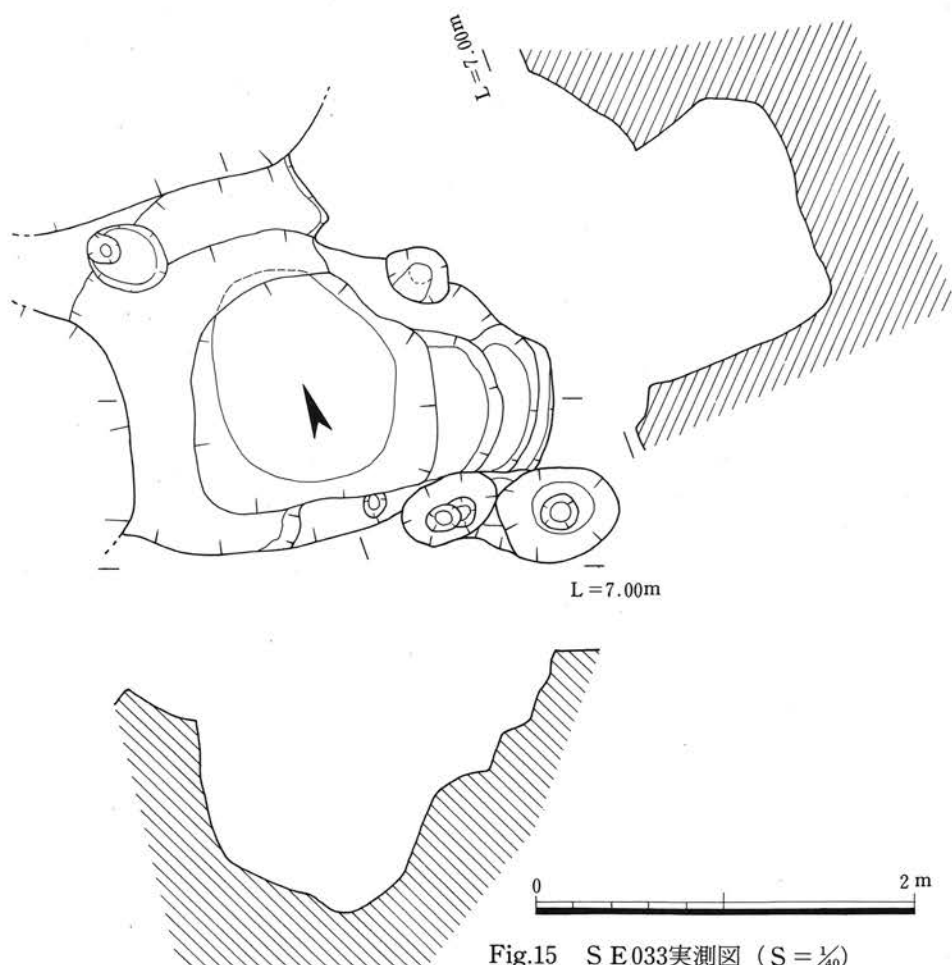


Fig.15 S E 033実測図 (S = $\frac{1}{40}$)

検出され、堆積状態から判断すると、井戸廃棄の際に礫を投げこんだものと考えられる。

(2)土壌

検出遺構の中で最も多かったのが土壌であり、28基を数える。但し、井戸状のものや土壌墓状の遺構など他の遺構との区別を明確にしえなかったものも含まれている。

S K 003 (Fig. 17)

調査区南西部に位置し、平面形は南北軸2.25m、東西軸0.8~0.9mの不整長方形を呈し、深さは約0.2mを測る。遺物は磁器片・土器片が少量出土しただけであった。

S K 004 (Fig. 18)

調査区南西隅に位置し、平面形は径約1.3mの不整円形を呈する。深さは約0.95mを測る。遺物は少量で殆どが細片だが、回転ヘラ切りの小皿片・瓦器片・滑石製石鍋片等が出土している。

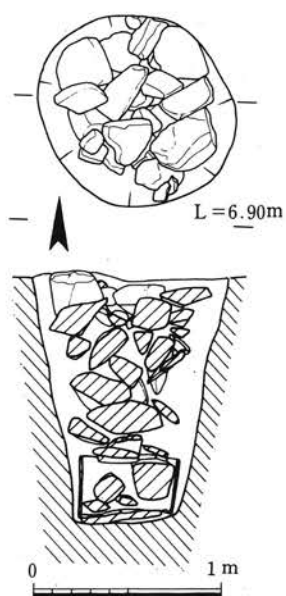


Fig.16 S E034実測図 ($S = \frac{1}{40}$)

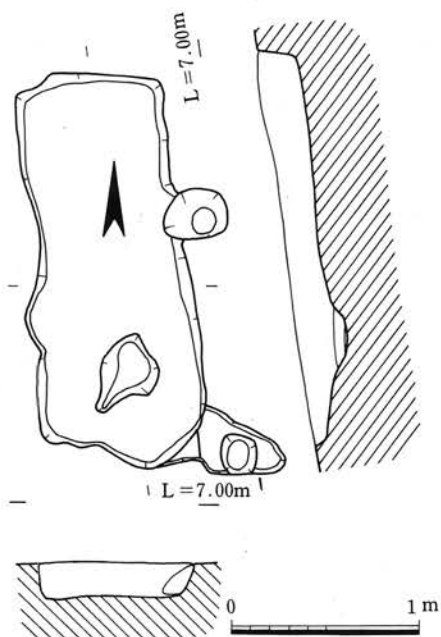


Fig.17 S K003実測図 ($S = \frac{1}{40}$)

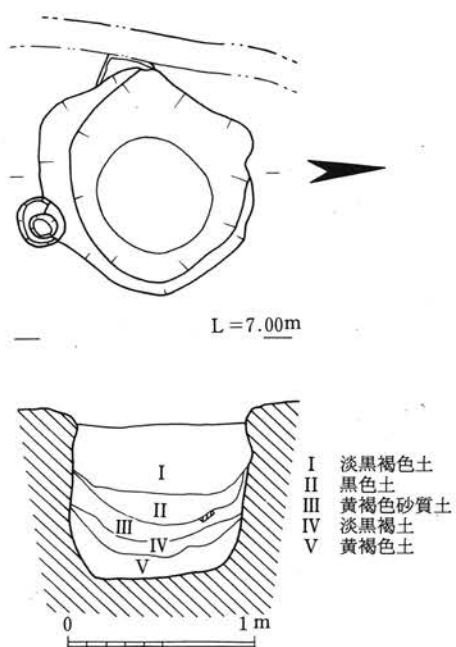


Fig.18 S K004実測図 ($S = \frac{1}{40}$)

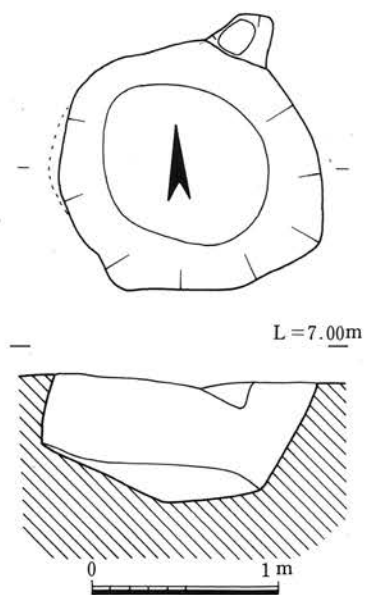


Fig.19 S K010実測図 ($S = \frac{1}{40}$)

S K010 (Fig. 19)

調査区南西部に位置し、平面形は径約1.4mの不整円形を呈する。深さは約0.6mを測る。S P009と切り合うが前後関係は不明。遺物は少ないが、瓦器埴片等が出土している。

S K011・S K042 (Fig.20)

調査区中央西部に位置する。S K011は径約1mの不整円形を呈し、深さ0.9mを測る。S K042も径約1mの不整円形で、深さ約0.6mである。切り合っていると思われるが、前後関係は不明。白磁碗片・黒色土器埴片・瓦器埴片・土師器坏片等が出土するが、いずれも細片であった。

S K012 (Fig. 21)

S K011の南東部に位置し、平面形は長径1.4m、短径1.2mの楕円形を呈する。深さは約0.7mを測る。瓦器埴等が出土した。

S K013 (Fig. 22)

調査区北西部に位置し、平面形は径約1.5mの円形を呈し、深さ約0.8mを測る。遺物の出土量は少なかったが、比較的良好な資料が得られている。

S K018 (Fig. 23)

調査区中央部付近に位置する。平面形は径約1.2mの不整円形を呈し、深さ約0.95mを測る。

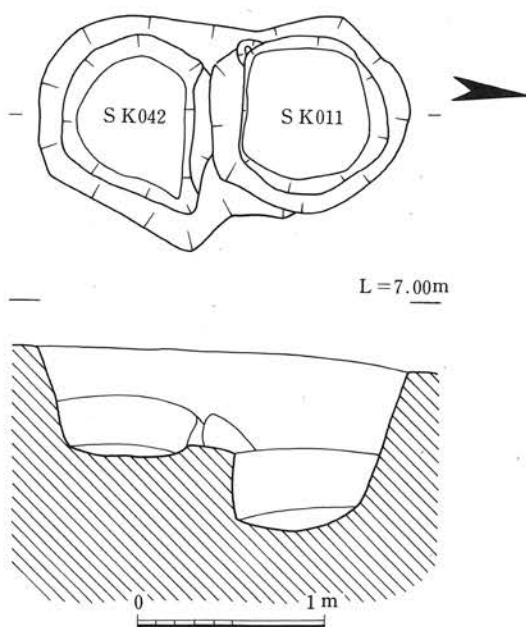


Fig.20 S K011、042実測図 (S = 1/40)

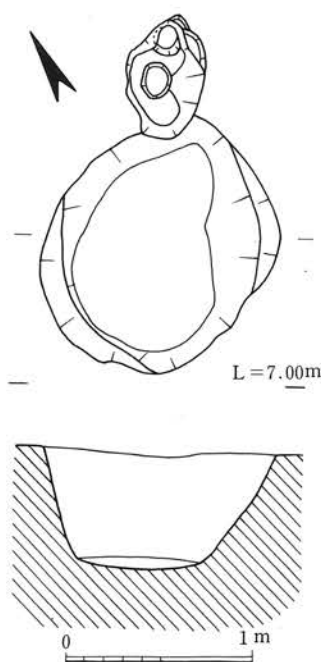


Fig.21 S K012実測図 (S = 1/40)

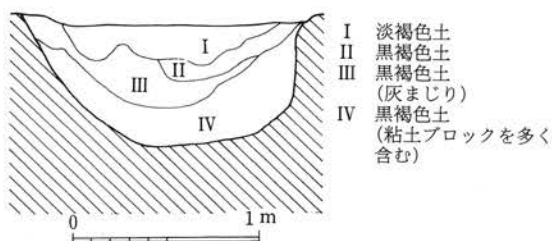
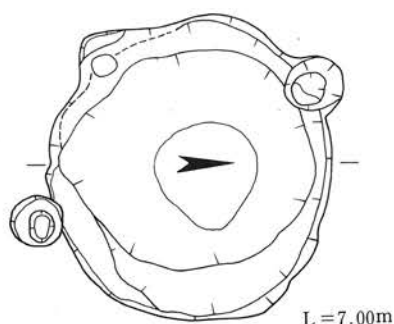


Fig.22 S K013実測図 (S = $\frac{1}{40}$)

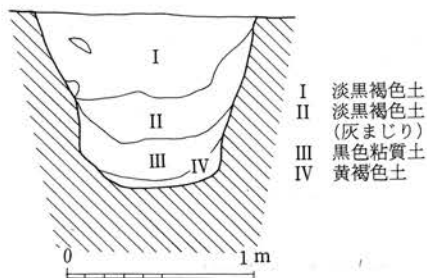
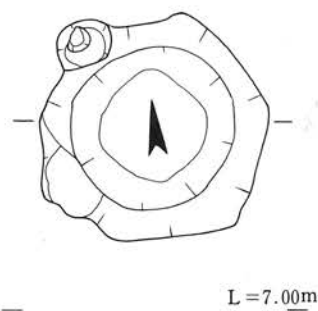


Fig.23 S K018実測図 (S = $\frac{1}{40}$)

遺物は殆どが土器細片だが、土師器小皿・埴、瓦器埴等が出土している。

S K019 (Fig. 24)

調査区中央東部に位置する。平面形は径約1.3mのほぼ円形を呈し、深さは約0.9mを測る。遺物出土量は少ないが、ほぼ同一規格の土師器小皿片・坏片が出土している。

S K021 (Fig. 25)

調査区南東部に位置する。平面形は長径約1.1m、短径約0.9mの不整楕円形を呈し、深さ約0.65mを測る。遺構埋土は黒褐色土で分層は出来なかった。出土遺物は細片が殆どであったが、土師器埴、黒色土器埴等がある。

S K022 (Fig. 26)

調査区東部に位置する。平面形は径約1mの不整円形を呈し、深さは0.6mである。遺物は土師器埴・坏片が出土しているが、いずれも細片でかろうじて器形がわかる程度である。

S K025 (Fig. 27)

調査区東部に位置する。平面形は東西幅1.5m、南北幅1.5mの不定形を呈し、最深部は約0.7mを測る。遺構東部の一部を残し、上面は0.15m程度削平されている。遺物は量的には多いが、良好なものを出土している。

S K026 (Fig. 28)

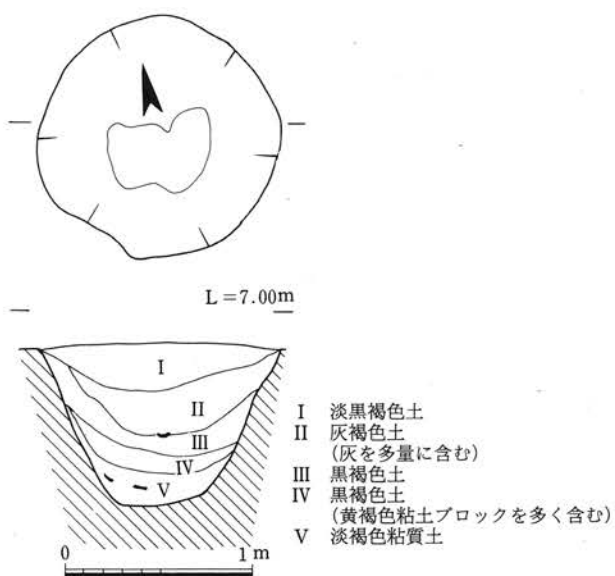


Fig.24 S K019実測図 (S = $\frac{1}{40}$)

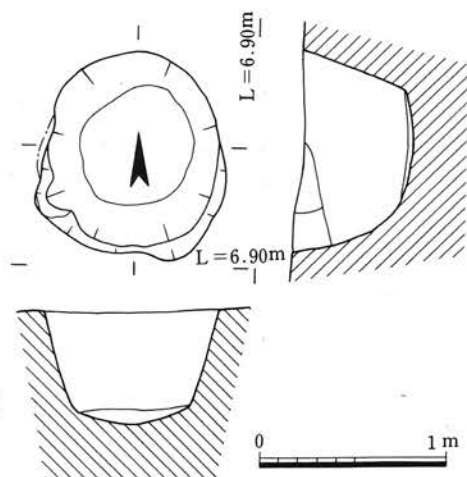


Fig.25 S K021実測図 ($\frac{1}{40}$)

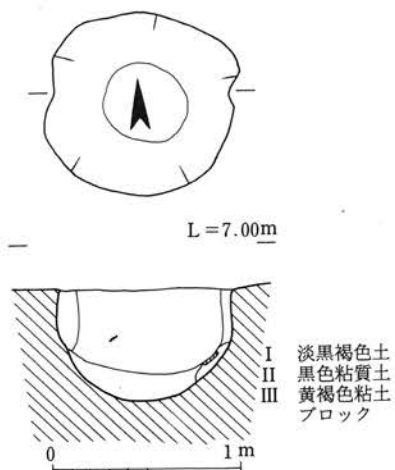


Fig.26 S K022実測図 (S = $\frac{1}{40}$)

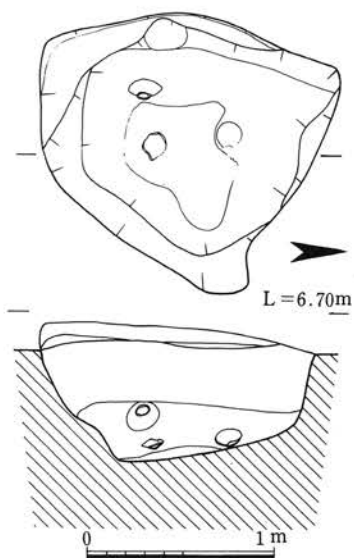


Fig.27 S K025実測図 (S = $\frac{1}{40}$)

調査区中央部、S X 027
に接して存在する。平面
形は南北幅1.5m、東西幅
1.2mの不定形を呈する。
深さ0.1m程度と浅いが、
北端では一段深くなって
いる。遺物は比較的多く
出土しており、特に西端
部では土師器坏が11枚重
なった状態で検出された。

S K 031 (Fig. 30)

調査区中央部に位置す
る。平面形は長径3.3m、
短径2.8mの不整円形状
を呈し、深さは約1mを
測る。中央部が一段深く
なった形状を呈する。

S K 040 (Fig. 31)

調査区北部に位置する。
長径1.25m、短径0.75m
の楕円形の平面形をもち、
深さ0.5mを測る。

S X 027 (Fig. 29)

調査区中央部に位置す
る。南北幅約3.4m、東西
幅約2.5mの不定形を呈
する。深さは約0.15m。
不整円形・不整楕円形の
浅い掘り込みと切り合っ
ているが先後関係は不明
である。S K 026同様、遺
物は比較的多く出土して
いる。特に遺構北部に遺
物は集中しており、床面

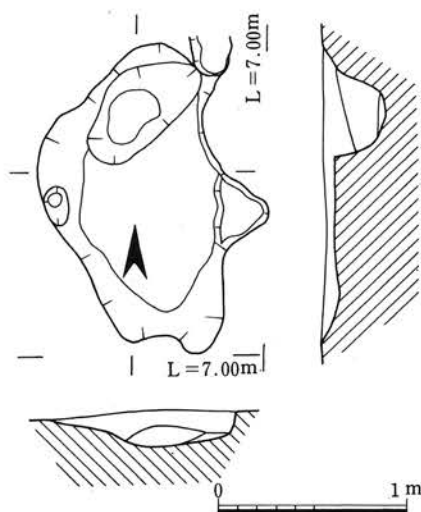


Fig.28 S K 026実測図 (S = 1/40)

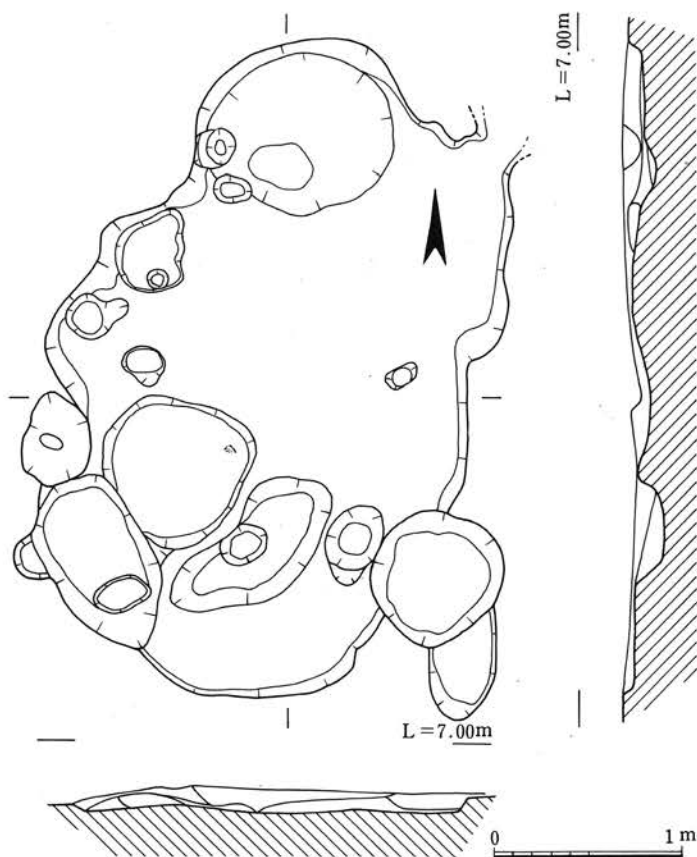


Fig.29 S X 027実測図 (S = 1/40)

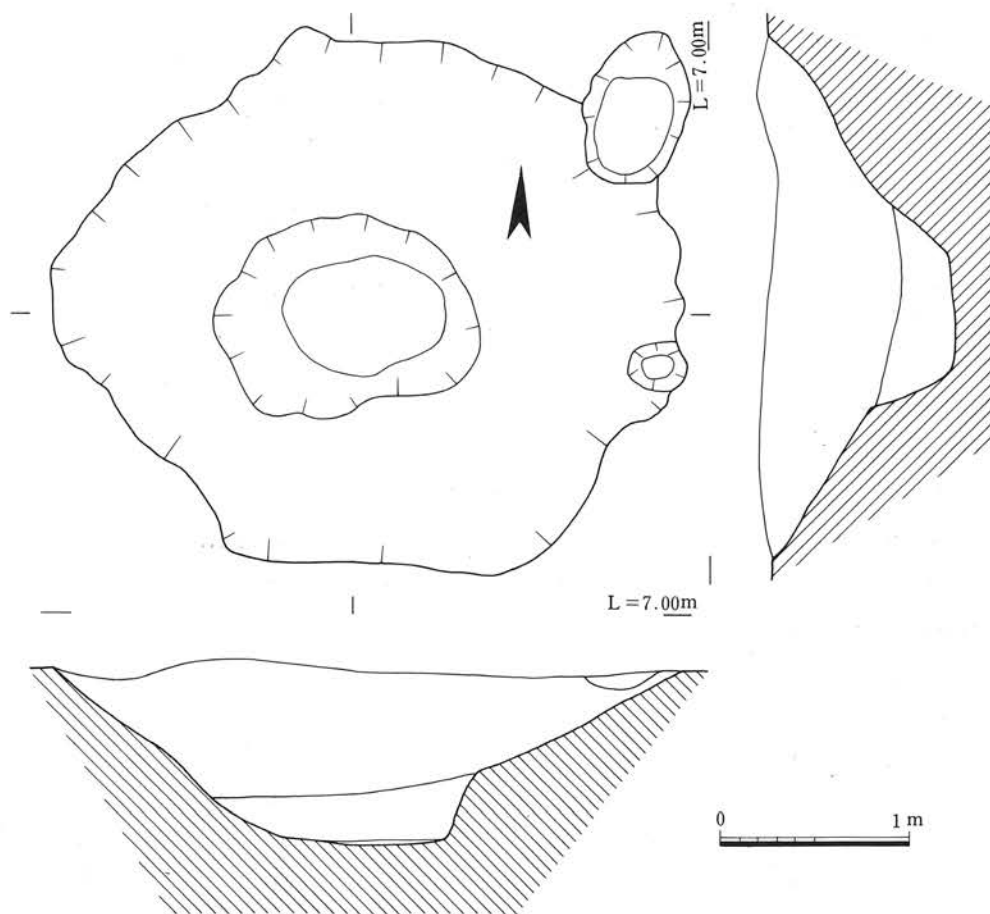


Fig.30 S K031実測図 ($S = \frac{1}{40}$)

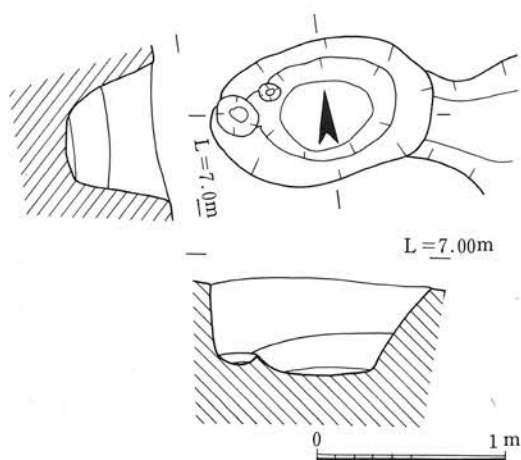


Fig.31 S K040実測図 ($S = \frac{1}{40}$)

直上から検出されている。深さが浅く、土墳と断定できないため不明遺構の番号を付した。

(3) 土墳墓

S P009 (Fig. 32)

調査区中央西部に位置し、平面形は長軸約2m、短軸約1.4mの隅丸長方形形状を呈する。深さは約0.5m。他にも土壇状の形状をもつ遺構は存在したが、規格の小さいことや遺物の出土状況等を考慮すれば、土墳墓と考えられるものはこの1基だけであった。

(4) 掘立柱建物跡 (Fig. 33~Fig. 36・48)

5棟を確認している。特にS B041とS B044はつながって存在していた可能性が高い。なお、柱筋には多少の出入りが考えられるため、各柱穴の形状か、確認された柱痕から判断した中心点間の距離を柱間寸法として図中に記載した。また、建物方位は座標北に対する建物南北軸の傾きである。

S B020 (Fig. 33)

調査区北西部に位置する。北部はS D002に切られており、残存部は3間×4間となっている。建物方位は東へ3度傾いている。

S B029 (Fig. 34)

調査区南部にある。遺構は調査区外に及んでいると考えられ、確認できたのは2間×3間の部分である。建物方位は東へ8度30分である。

S B041 (Fig. 35)

調査区中央部付近に位置し、基本的には2間×4間と思われる。但し、北西隅と西梁筋中央の柱穴は確認できなかった。建物方位は東へ11度である。

S B043 (Fig. 36) 調査区中央部に位置する2間×2間の建物である。建物方位は東へ1度である。

S B044 (Fig. 48)

S B029と切り合って存在する建物で、S B041とつながると考えられる。南側梁筋中央の柱穴はないが、これより南にはのびないと思われる。

(5) 溝 (Fig. 48)

確実なものとして3条を確認しているが、特にS D001とS D002はつながっており、S D036も埋土の状態や出土遺物等より同一時期の所産である可能性が高い。S D001は調査区北部にあり、幅約1.5m、深さ約0.5~0.8mを測り、断面形は逆台形を呈する。北部が高く、途中で約0.3

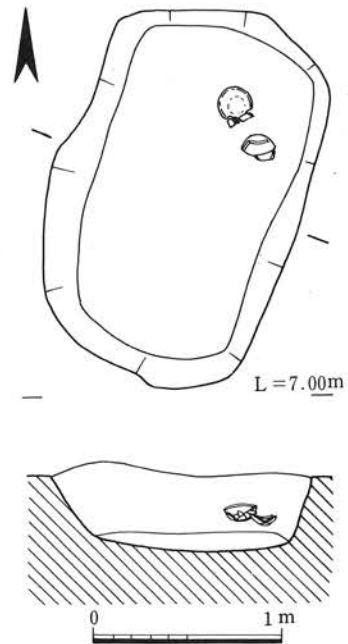


Fig.32 S P009実測図 (S = 1/40)

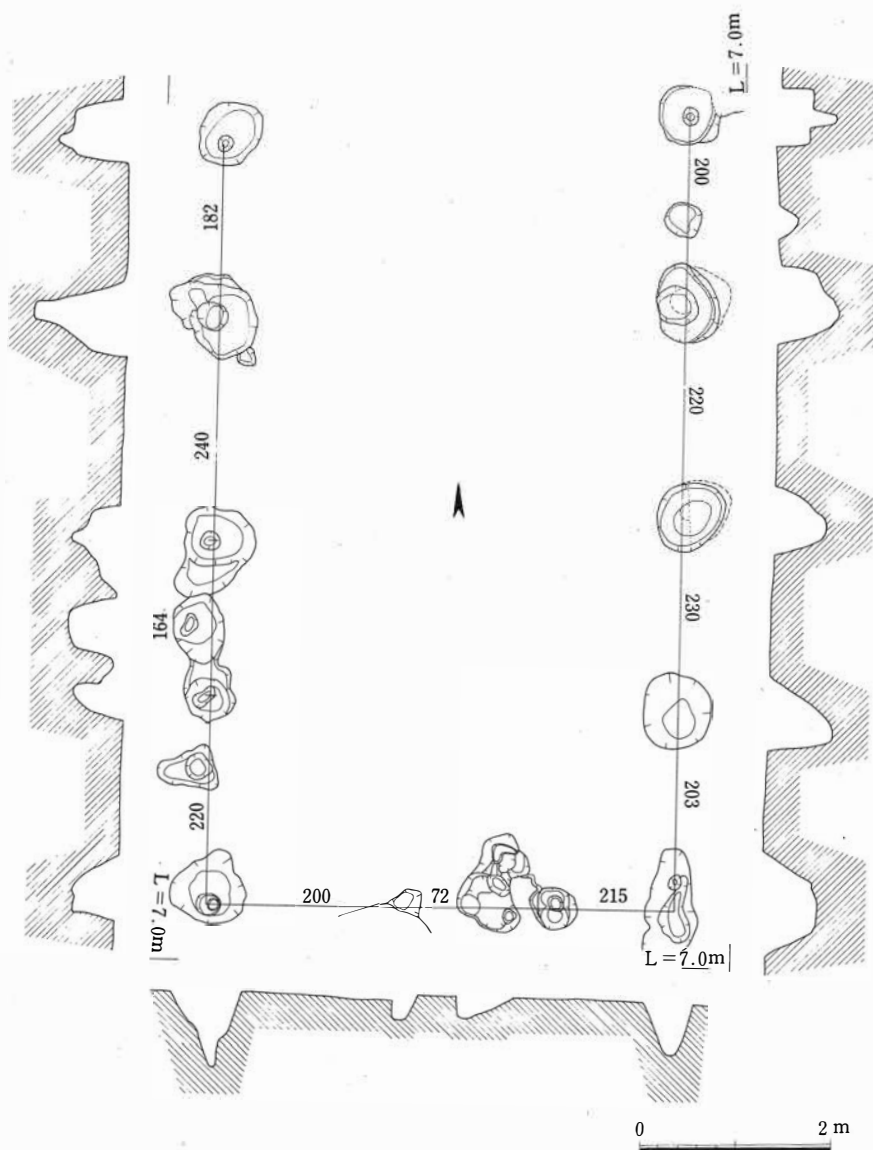


Fig.33 S B020掘立柱建物跡実測図 (S = $\frac{1}{80}$)

mの段差をもつ。S D002との接合部は急激に狭くなっている。S D002は幅約2.2～3.2m、深さは0.6～0.7mを測り、東西に延びる。S D036は調査区東端部にある南北に延びる溝である。上面は削平されており、残存部は幅1.2～2 m、深さ0.4～0.5mを測る。断面形は逆台形を呈する。南部と北部のレベル差は小さく、ほぼ平坦である。

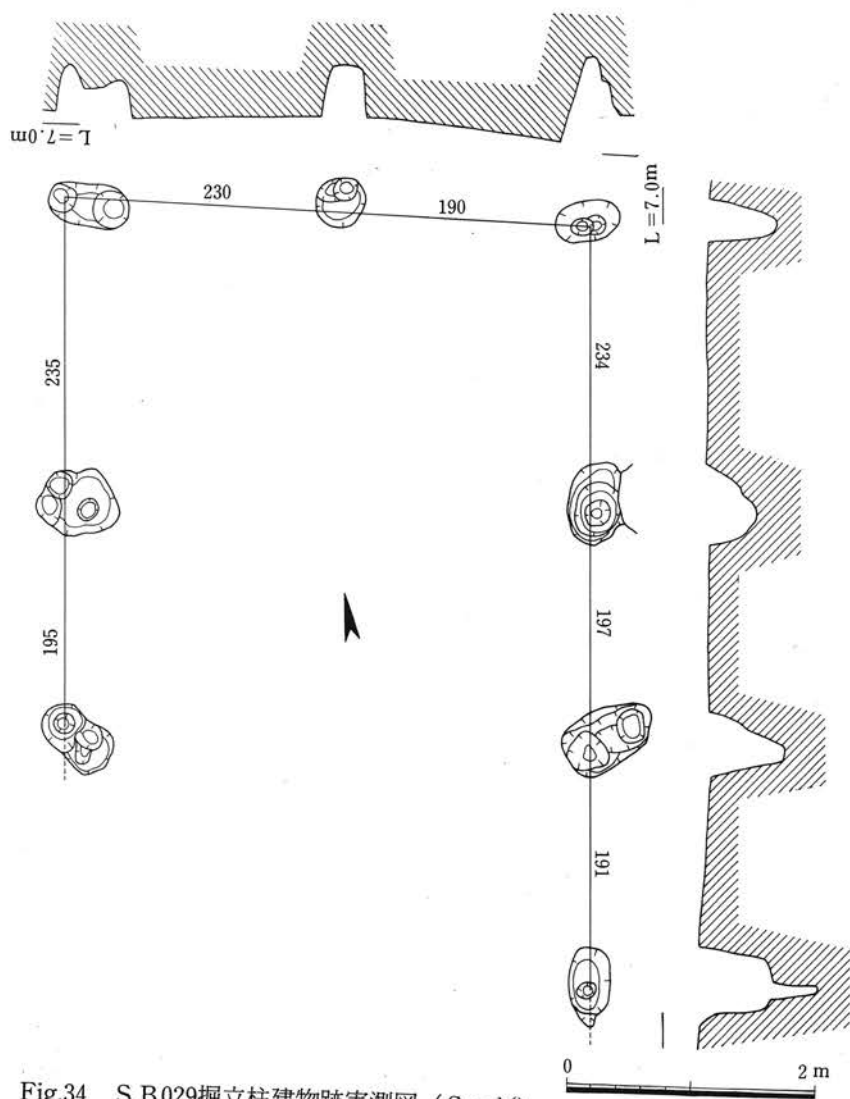


Fig.34 S B 029掘立柱建物跡実測図 ($S = \frac{1}{60}$)

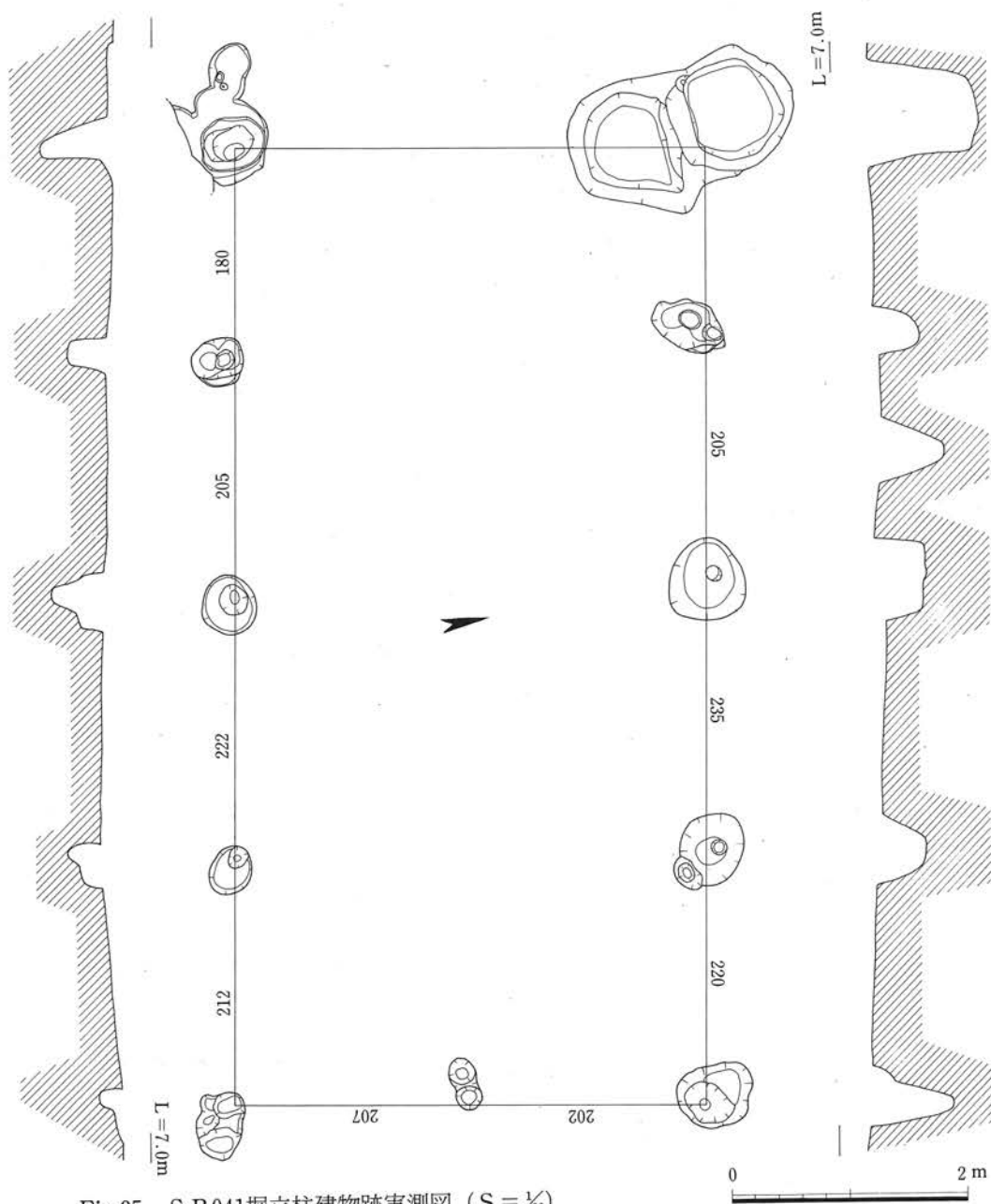


Fig.35 S B041掘立柱建物跡実測図 (S = 1/50)

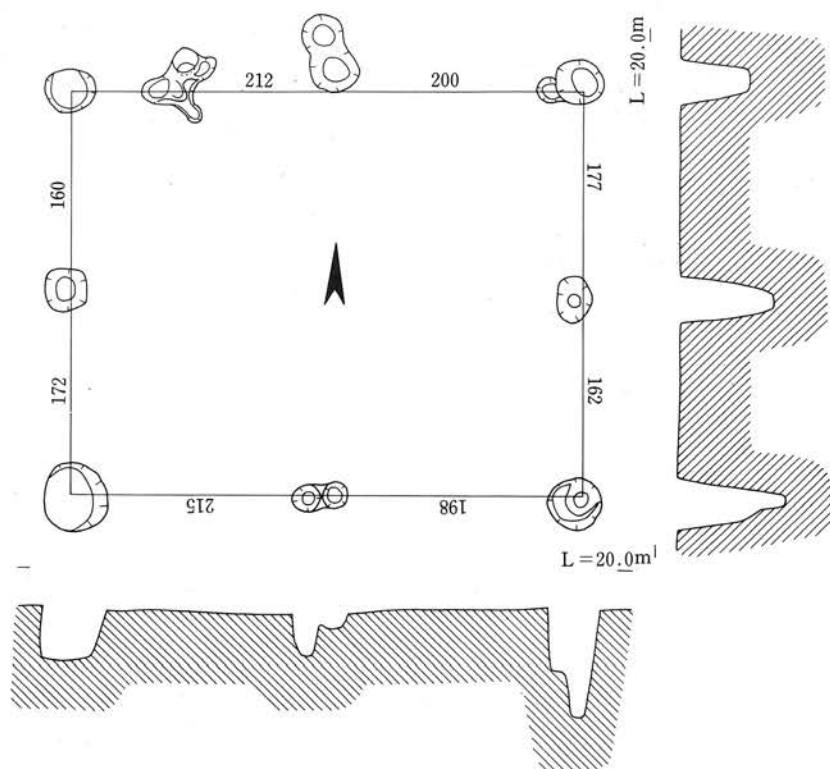


Fig.36 S B043掘立柱建物跡実測図 (S = $\frac{1}{60}$)

0 2 m

B地区の遺物 (Fig. 37~46)

S D001・S D002出土遺物 (Fig. 37・38)

土師器小皿 (55~59) すべて糸切りである。口径6.2~7.8cm、器高1.7~2.5cmを測る。

土師器坏 (60・61) 糸切りである。60は口径11.4cm、器高3.6cmを測る。いずれも微細粒子・雲母を少量含み、明黄褐色を呈する。焼成は良い。

青磁皿 (62・63) 口径・器高は、62が11cm・3.5cm、63が9.5cm・3.2cmを測る。いずれも削り出しの高台をもち、62は内面見込みに、63は内面見込みと高台疊付部に目跡を残す。62は明黄褐色、63は薄青灰色を呈する。

白磁碗 (64・65) 64は復元口径17.2cmを測り、口縁部を玉縁にしている。胎土は灰白色を

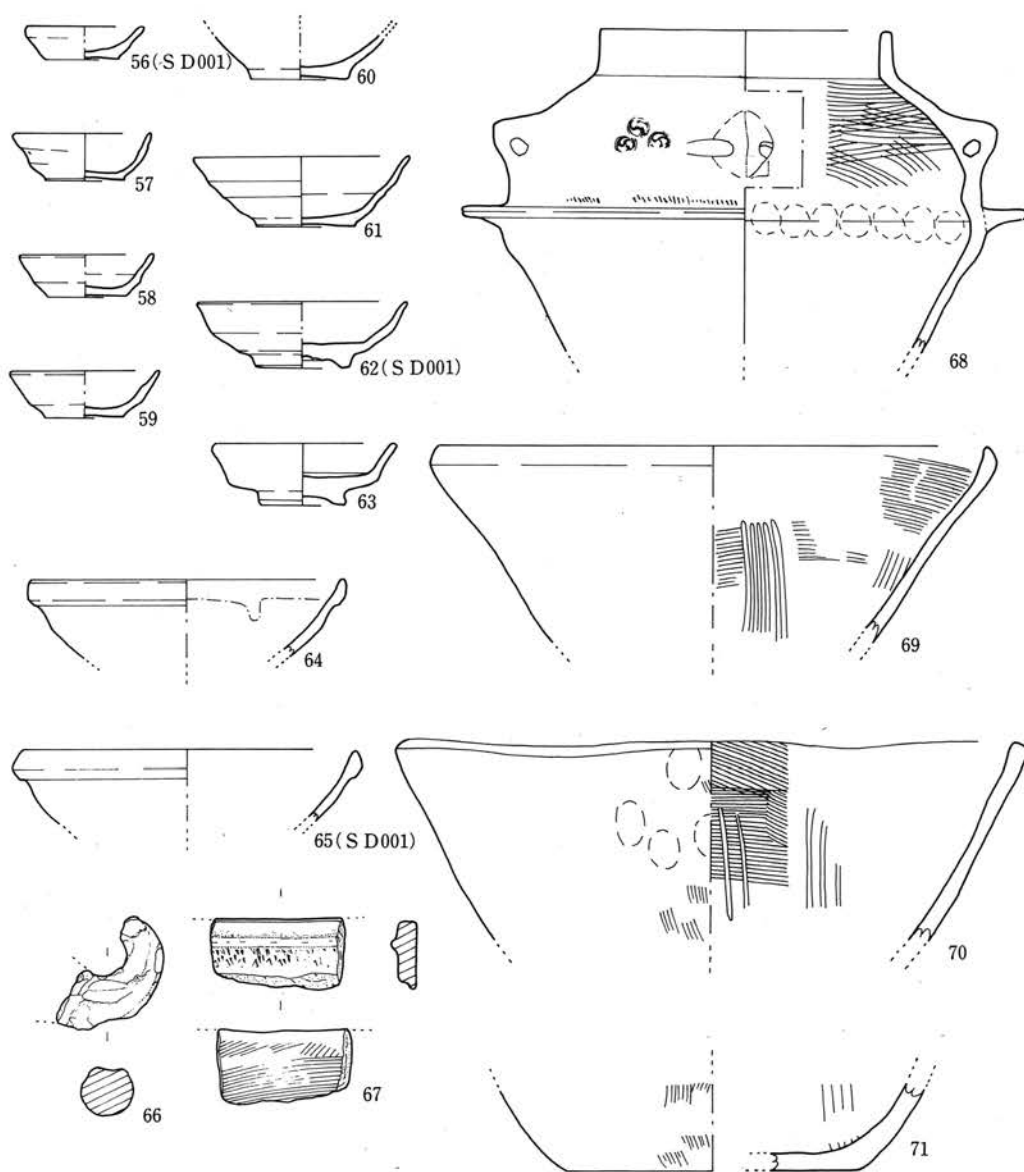


Fig.37 B地区 S D001、002出土遺物実測図 ($S = \frac{1}{4}$) 0 10cm

呈する。内外器面には細かい貫入があり、口縁部に釉溜りがみられる。65は復元口径17.4cmを測り、口縁部は玉縁にしている。胎土は灰白色を呈し、外器面には大きな貫入が入る。口縁部には釉溜りがみられる。

把手 (66) 土師質の把手で、粗い削りにナデ調整を加えている。

鉢 (67) 口縁部片のみの出土である。平坦な口縁端部で、一条の突帯をもち、その下位に

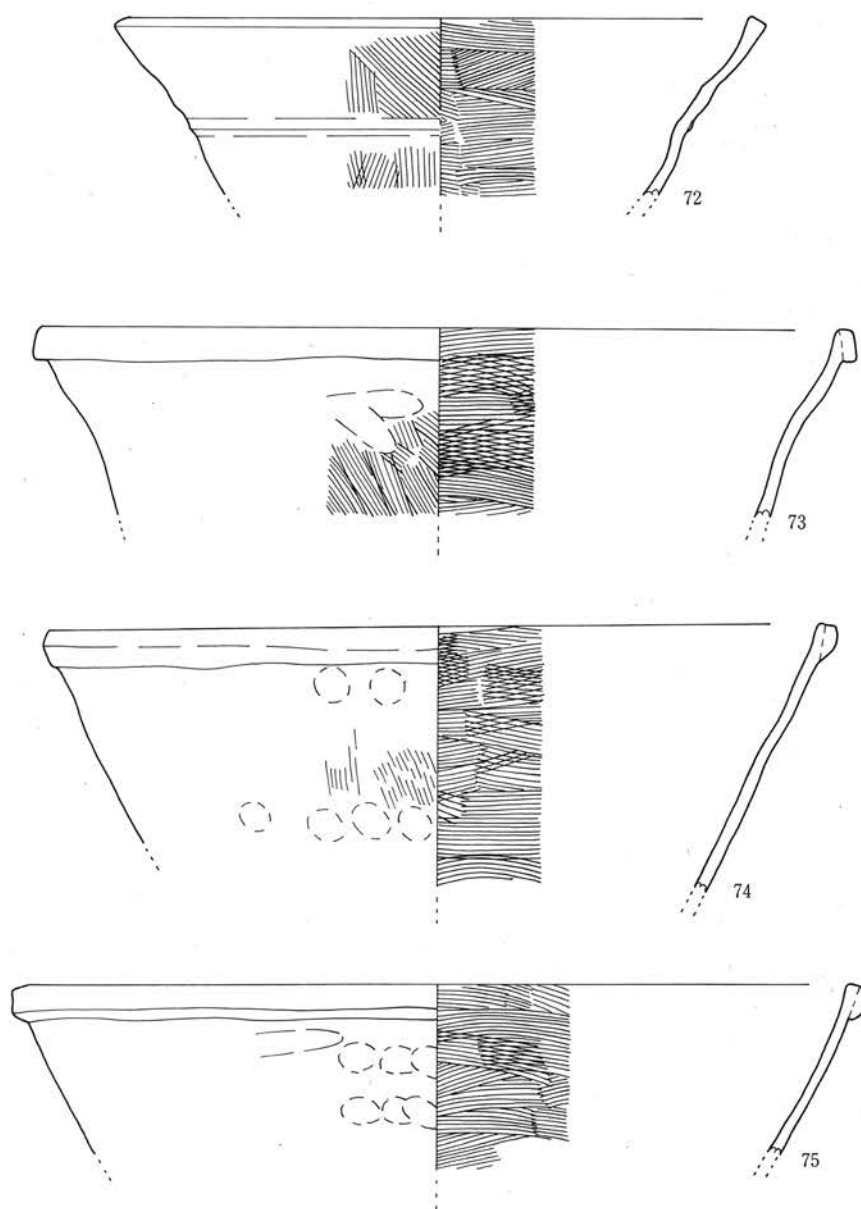
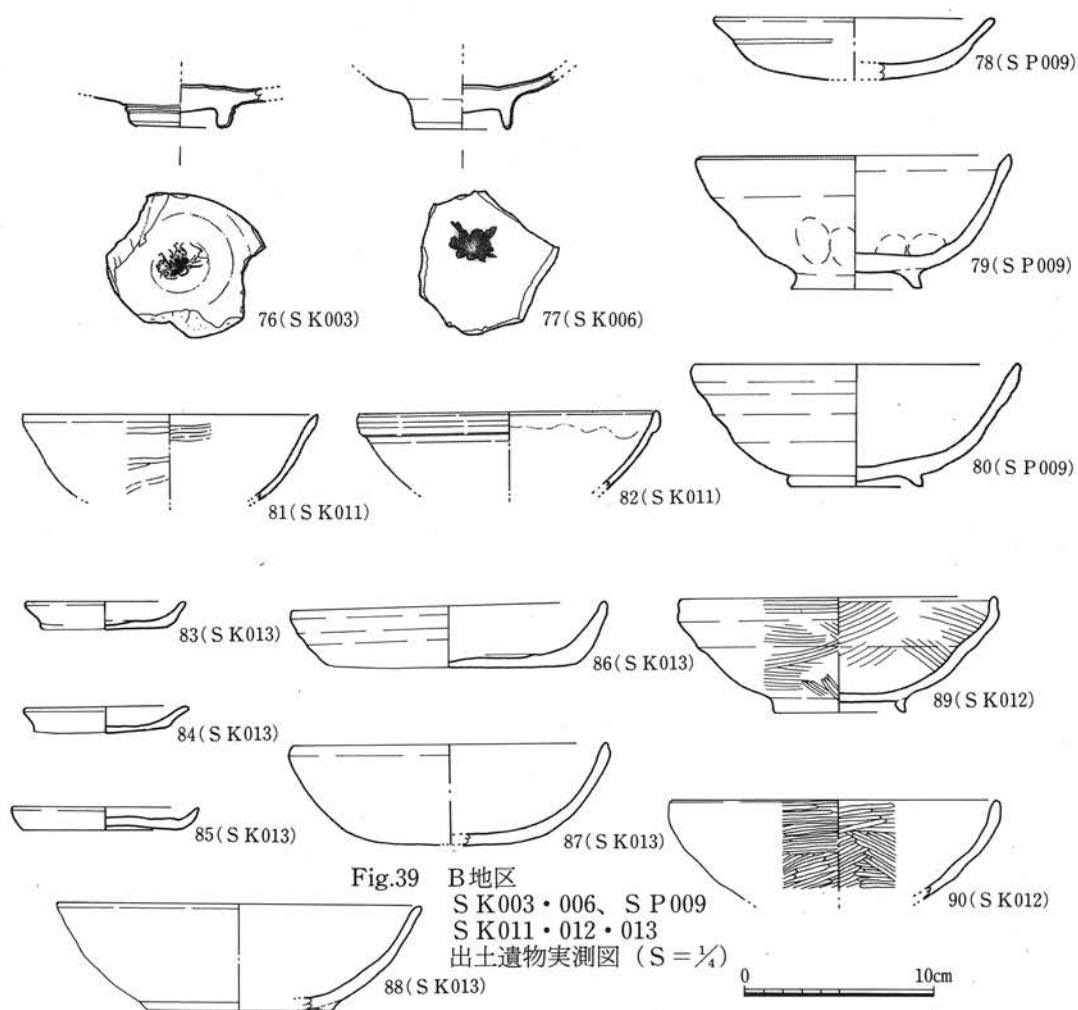


Fig.38 B地区 S D002出土遺物実測図 ($S = \frac{1}{4}$) 0 10cm

のスタンプを配している。胎土は粗く、内器面にはハケ目を施す。

羽釜(68) S D002床面出土である。復元口径14.5cmを測る。内面は胴部中位以下には横ナデ、中位以上にはハケ目調整が施され、屈曲部には指頭痕を残す。外面胴部中位以下にはハケ目を施す。胎土には細砂粒を含むが比較的精良である。口縁から胴部中位までは黒く焼けている。

摺鉢 (69～71) 復元口径は69が29cm、70が32cmを測る。器面のあれが激しく調整は不明瞭



だが、内面には横方向ハケ目、外面には横ナデが施されている。69は5条、70は3条、71は4条の櫛目が一単位として入る。胎土はどれも粗く、細粒子を多量に含む。

鍋（72～75）復元口径は72が33cm、73が43.6cm、74が41cm、75が43.6cmを測る。内面にはいずれも横方向のハケ目調整を施し、外面にはハケ目ないしはナデ調整を行う。72は屈曲部に突帯状のものを有する。いずれも胎土中には細粒子を多く含み、基本的には黄褐色を呈するが、胴部上位は煤がかなり付着する。

SK003出土遺物 (Fig. 39、76)

青磁碗（76） 底部のみの出土である。削り出し高台の内面は無釉だが、畳付部には部分的に釉が流れている。内面見込みに花文が入る。器面は淡緑色を呈し、胎土は淡灰色で良質のもの

のである。

S K006出土遺物 (Fig. 39、77)

青磁碗 (77) 底部のみの出土である。先端をうすく削り出した高台をもち、高台内面まで施釉が及んでいる。高台端部に目跡を残す。内面見込みには花文が入る。胎土は淡灰色、器面は薄緑色を呈する。

S P009出土遺物 (Fig. 39、78~80)

土師器坏 (78) 復元口径14.5cm、器高3.3cmを測る丸底の坏である。ヘラ切りが体部まで及んでいる。内底にはナデ、体部には横ナデが施される。色調は明黄褐色で、焼成は良い。

瓦器碗 (79~80) 79は口径16.2cm、器高7cmを測る。80は口径17.1cm、器高6.6cmを測る。両者とも器面があられているため調整は不明瞭だが、外面にヘラ削り、内面はみがきが施されていると思われる。内面にはこてあて痕が残る。明黄白色を呈し、軟質の胎土である。

S K011出土土器 (Fig. 39、81・82)

土師器碗 (81) 復元口径15.4cmを測る。内外器面には不明瞭だがミガキを行っている。暗褐色を呈し、若干瓦器に似る。

白磁碗 (82) 口縁部は玉縁にしており復元口径15.4cmを測る。胎土は白色を呈し、黄白色の釉がかかる。

S K012出土遺物 (Fig. 39、89・90)

瓦器碗 (89・90) 89は復元口径16.5cm、器高6.1cm、90は復元口径17.7cmを測る。2点とも、内外器面にはヘラミガキを行っている。暗灰色の色調を呈し、光沢をもつ。

S K013出土遺物 (Fig. 39、83~88)

土師器小皿 (83~85) 83は口径8.5cm、器高1.4cm、84は口径8.6cm、器高1.6cmを測るヘラ切り小皿である。内底にはナデを施し、外底には板状圧痕を残す。85は口径9.8cm、器高1.2cmを測る。糸切りで、内底にはナデを施し、外底には板状圧痕を残す。

土師器坏 (86) 口径16.5cm、器高3.5cmを測る。糸切りで、内底にナデ調整を行い、外底にはかすかだが板状圧痕を残す。

瓦器碗 (87・88) 87は復元口径16.6cmを測る。高台部を欠失する。体部外面下半はヘラ削り調整で、他は横ナデ或いはナデ調整のようである。内面及び口縁外面は暗灰色を呈するが、底部付近は暗黄褐色を呈する部分がある。88は

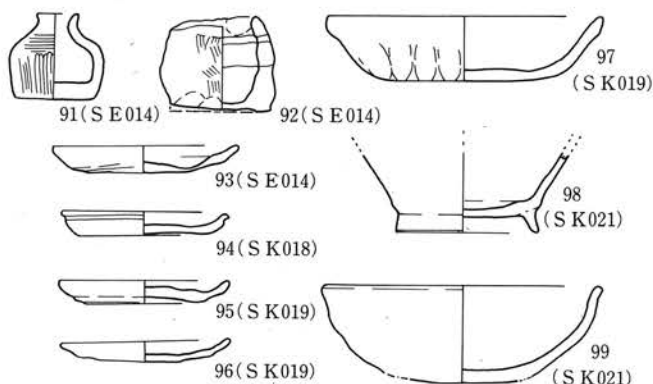


Fig.40 B地区 S E014、S K018 S K019、S K021出土遺物実測図 (S = $\frac{1}{4}$)

復元口径19cm、器高は5.7cmを測る。器面は磨耗しており、調整は不明。口縁部付近は黒色、他は黄灰色ないしは明灰色を呈する。

S E014出土土器 (Fig. 40、91~99)

小壺 (91) 口径2.1cm、器高4.8cmを測る。土師器であり、胴部にはハケ目、胴部から口縁部にかけては横ナデを施し、その上に丁寧なミガキを施している。色調は黒褐色を呈する。井戸底からの出土である。

筒形土器 (92) 口径5cm、器高5.2cmを測る土師器である。円盤状の粘土に粘土紐を輪積みする手法で作製されており、内面にはナデ、外面にはハケ目調整を行っている。黄褐色を呈する。全体的に稚拙なつくりである。

土師器小皿 (93) 口径9.7cm、器高1.45cmを測る。ヘラ切りであり、内底にナデ調整を行い、外底には板状圧痕を残す。

S K018出土遺物 (Fig. 40、94)

土師器小皿 (94) 口径8.5cm、器高1.3cmを測る。ヘラ切りで、内底にナデ調整を行い、外底に板状圧痕を残す。

S K019出土遺物 (Fig. 40、95~97)

土師器小皿 (95・96) 口径は95が8.8cm、96が8.9cmを測り、器高はともに1.2cmを測る。2点ともヘラ切りで、内底にナデ調整を行い外底には板状圧痕を残す。

土師器坏 (97) 口径14.2cm、器高3.5cmを測る。ヘラ切りで、内底はナデ調整を行う。外底に板状圧痕は認められない。

S K021出土土器 (Fig40、98・99)

土師器碗 (98) 底部のみが残存する。高台を有し、底部にナデ調整が施されているが、ヘラ切りと板状圧痕が認められる。

黒色土器碗 (99) 黒色土器A類である。口径16.4cmで、高台部を欠失している。外面は底

部から体部中位までヘラ削り、それ以上はヘラミガキを、内面は丁寧な横方向のヘラミガキを施している。外面は黄褐色を呈し、内面は真黒色で光沢を放つ。

S K025出土遺物 (Fig. 41、100~106)

土師器小皿(100・101) 100は復元口径8.7cm、器高0.9cm、101は復元口径9.8cm、器高0.8

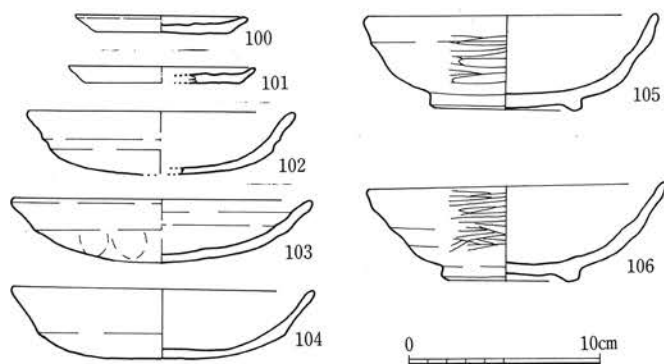


Fig.41 B地区 S K025出土遺物実測図 (S = 1/4)

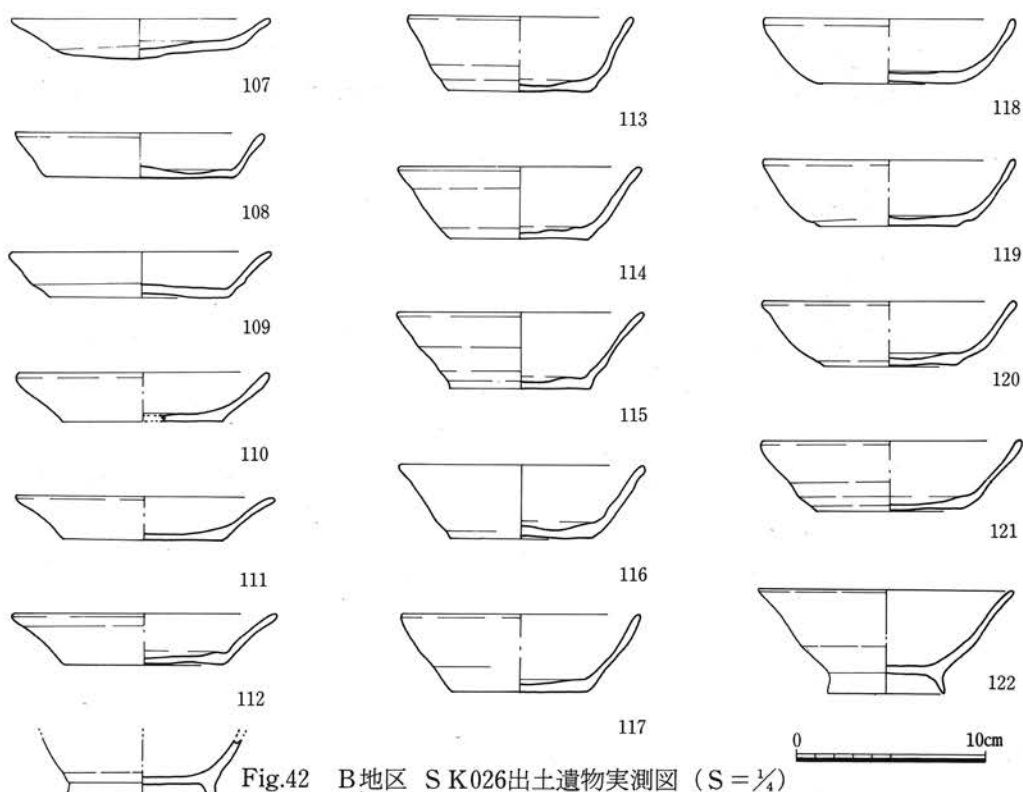


Fig.42 B地区 SK026出土遺物実測図 (S=1/4)

123
cmを測る。ヘラ切りである。板状圧痕は認められない。

土師器坏 (102~104) 口径14~15.6cm、器高3.3~3.4cmを測る。いずれも体部内外面に横ナデ、内底にナデを施し、底部はヘラ切りである。104は板状圧痕を有するが他のものには認められない。また102は内面の一部に暗褐色の付着物が認められた。

土師器碗 (105) 口径15.5cm、器高5.3cmを測る。外器面には丁寧な横方向のヘラミガキが施されている。内器面にもミガキが施され、こてあて痕が認められる。内底から体部中央にかけては暗灰色を呈するが、他は暗黄褐色を呈する。

黒色土器碗 (106) 口径15.2cm、器高5.2cmを測るB類の完形品である。外器面には丁寧な横方向のヘラミガキが施され、内器面にもミガキが施され、こてあて痕を残している。内外面とも真黒色を呈する。

S K026出土遺物 (Fig. 42、107~123)

土師器坏 (107~121) 器高と体部形状によって3類に大別できる。107~112は口径13~13.8cm、器高2.1~2.7cm、底径8.4~9.8cmを測る。すべてヘラ切りで、内底にはナデを施す。107・108・110ははっきりしないが、その他は外底に板状圧痕を有する。113~117は口径11.6~12.7cm、器高は3.8~4.1cm、底径7~7.4cmを測る。ヘラ切りで、内底にはナデを施し、114以外は外底に板状圧痕を有する。118~121は口径13.2~13.6cm、器高3.4~3.7cm、底径6.8~7.4cmを

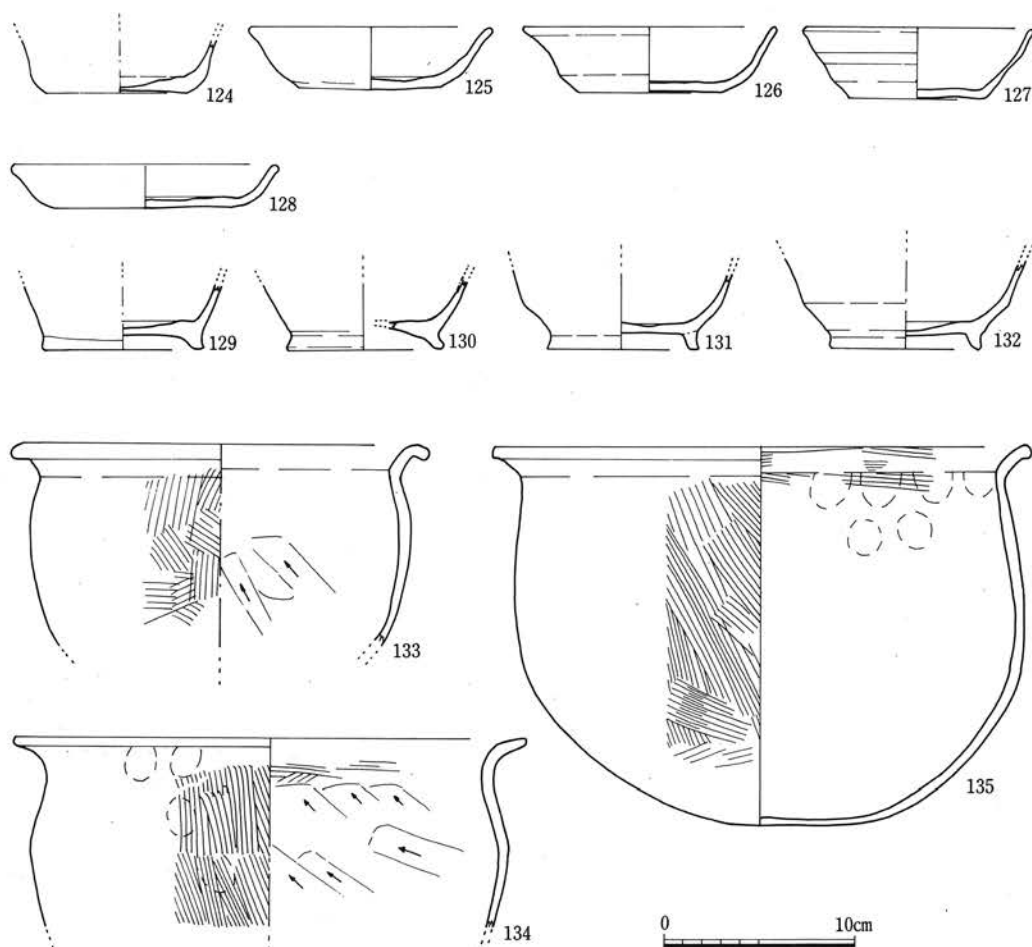


Fig.43 B地区 SX027出土遺物実測図 (S = ¼)

測る。すべてヘラ切りで、内底にナデを施し、外底に板状圧痕を有する。107～121はすべて明黄褐色を呈し、胎土には雲母を含む。焼成は良い。また、116を底として115→120→121→113→117→112→111→110の順で重なって出土した。全部で11点であったが、その内2点については図化できなかった。

土師器碗 (122・123) 122は復元口径13.4cm、器高5.5cmを測る。体部は横ナデ、他部にはナデ調整を行う。黄褐色を呈する。123は底部片で、体部には横ナデ、内底にはナデ、底部にはヘラ切りの後にナデ調整を行っている。黄褐色を呈する。

SX027 (Fig43、124～135)

土師器杯 (124～128) 復元口径及び器高は125が12.6cm・3.3cm、126が13.2cm・3.8cm、127が11.8cm・3.8cm、128が13.8cm・2.3cmを測る。すべてヘラ切りで、内底にはナデを施す。124・127以外は外底に板状圧痕を残す。また126・127は外器面が部分的に黒く焼けている。

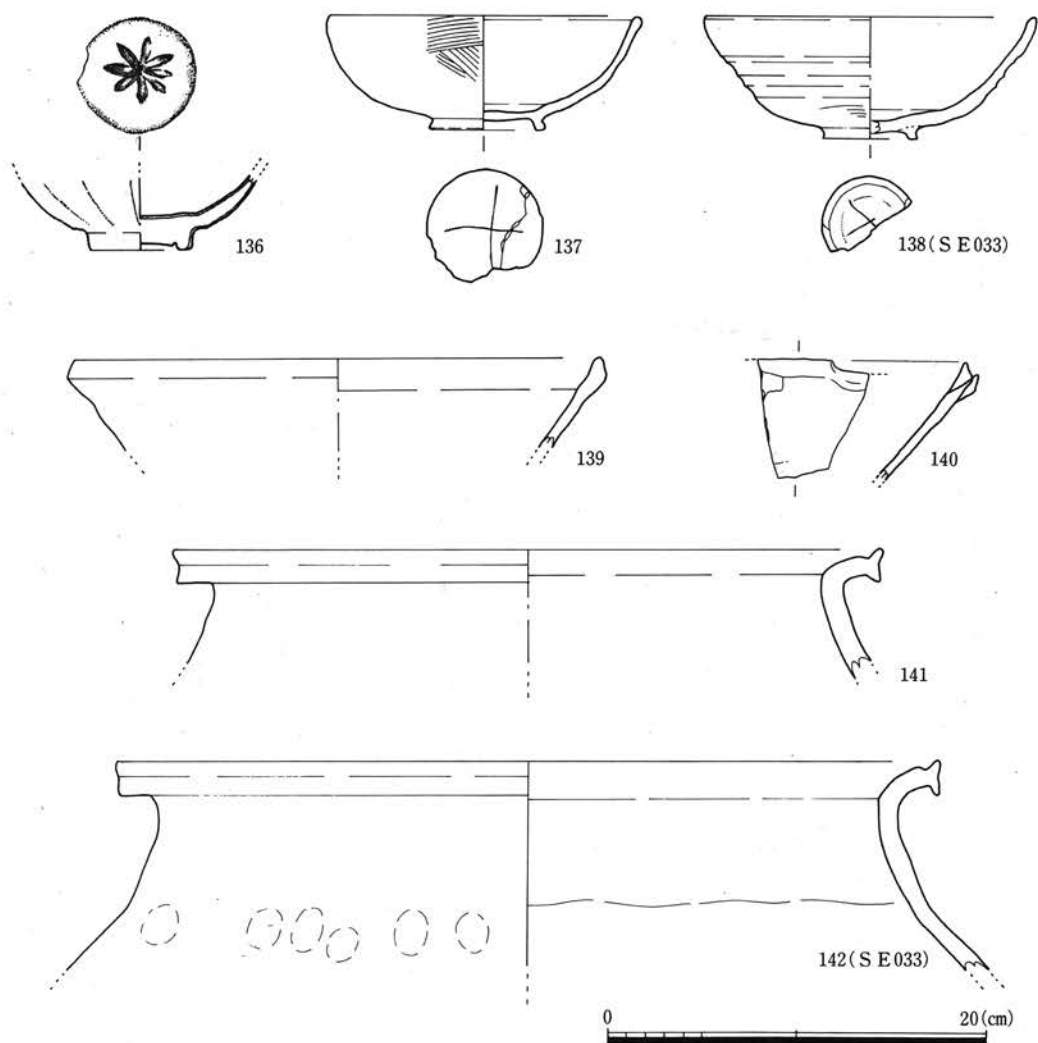


Fig.44 B地区 SK031、SE033出土遺物実測図 ($S = \frac{1}{4}$)

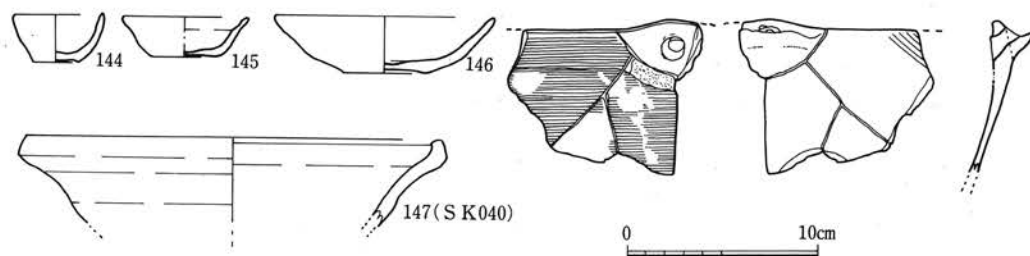


Fig.45 B地区 SD036、SK040出土遺物実測図 ($S = \frac{1}{4}$)

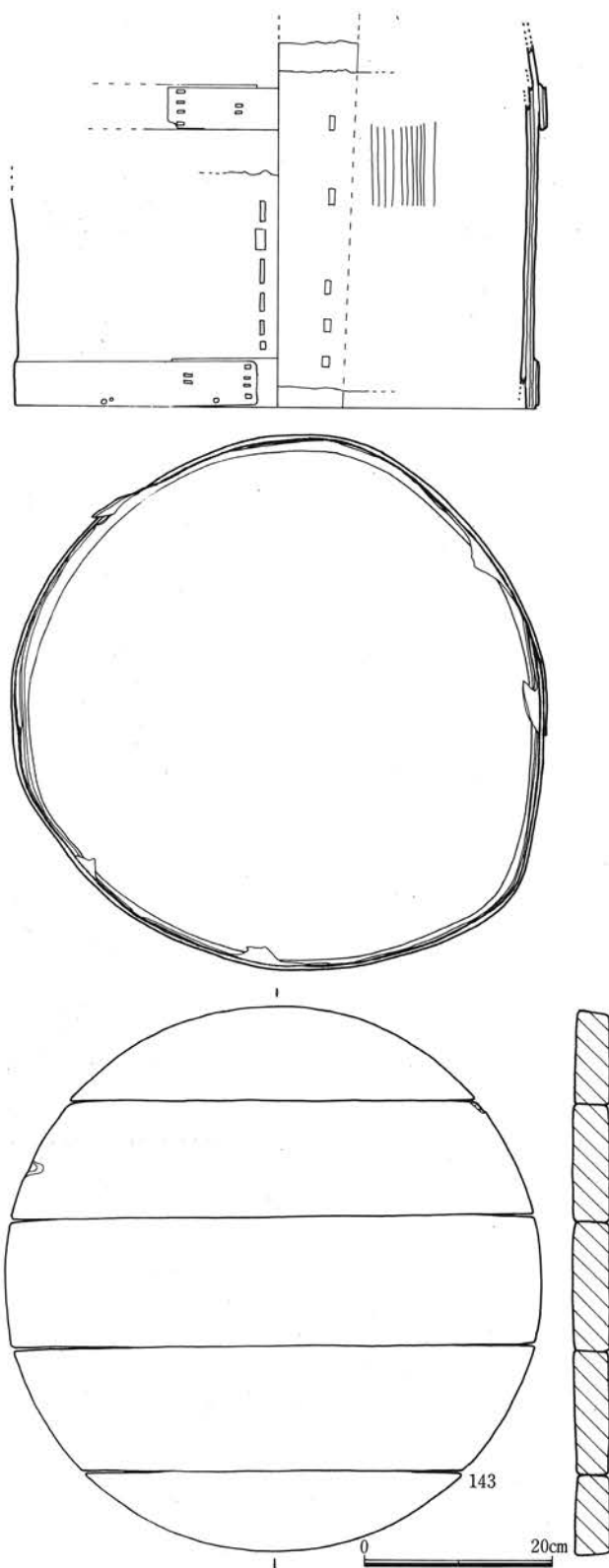


Fig.46 B地区 S E 034出土遺物実測図 (S = $\frac{1}{8}$)

土師器碗(129~132) いずれも口縁部を欠いており口径・器高は不明。体部内外面には横ナデ、内底にはナデを施す。坯同様胎土には雲母を含み、色調は明黄褐色ないしは赤褐色を呈する。

土師器甕(133~135) 復元口径は133が20.8cm、134が26.8cm。135は復元口径28cm、器高20.3cm。内面はヘラ削り、外面はハケ目を施し、口縁付近は横ナデ調整である。

S K 031出土遺物 (Fig. 44、136・137・139~141)

青磁碗(136) 外器面には削り出しの連弁文をもち、内面見込みには菊花様のスタンプが入る。釉は高台畳付部にも流れている。胎土は明灰色で、器面は淡緑色を呈する。

瓦器碗(137) 復元口径16.2cm、器高6cmを測る。外面は横方向のミガキを行っており底部付近はヘラ削りである。内面も口縁付近は横方向のミガキだが、体部下半は不明瞭である。底部にヘラ記号がみられる。暗灰色を呈する。

須恵質鉢(139・140) 139は復元口径27.6cm。灰色を呈する。140は片口で明灰色を呈する。

常滑甕(141) 胎土は比較的良く、外面には若干緑色がかった

た暗灰色の釉がかかる。

S E033出土遺物 (Fig.44、138・142)

瓦器碗 (138) 復元口径17.4cm、器高6.5cmを測る。外面はヘラ削りが口縁付近まで及ぶ。内面はミガキが行われ、こてあて痕を残す。内面は明灰色、外面は黄灰色を呈し、底部にはヘラ記号をもつ。

常滑甕 (142) 復元口径43.4cmを測る。胎土は良質で焼成も良い。外器面の一部に緑色がかつた暗灰色の釉がかかる。外器面には指頭圧痕を残す。

S E034出土遺物 (Fig. 46)

井戸枠 (143) 井戸底より検出した。残存高39.6cm、最大直径60.5cmを測る。上部は欠失している。厚さ約0.4cmの薄板を2枚使用しており、幅4.5cm、厚さ0.4cmの^{なが}籬を上下2段にかけている。板の重なる部分は樹皮で丁寧に留められている。薄板の内面には曲げを行い易いように刻みを施している。底部は厚さ約4cmの板を5枚組み合わせて底板をつくっている。非常に丁寧なつくりであり、おそらく日常品を転用し、井戸枠として利用したものと思われる。

S D036出土遺物 (Fig. 45、144～147)

土師器小皿 (144・145) 144は口径4.6cm、器高2.5cm、145は口径6.5cm、器高2.1cmを測る。いずれも糸切り底である。明黄褐色を呈する。

土師器杯 (146) 口径11.4cm、器高3cmで糸切り底である。板状圧痕は不明瞭である。

鍋 (147) 土師質である。内外器面にはハケ目調整を施しているが、外器面は不明瞭になっている。また、口縁下部の外器面には媒の付着がみられる。

S K040出土遺物 (Fig. 45)

鉢 (148) 須恵質である。復元口径21.8cmを測る。

V. 小 結

今回の調査では平安時代から中世までの遺構・遺物を検出した。

掘立柱建物跡はB地区において、S B020・S B029・S B041・S B043・S B044の5棟を確認している。特にS B041とS B044は建物方位を同じくし、柱穴を共有していることから同時期に存在したものと思われる。この他には建物方位が同一のものはないが、S B020とS B043は若干近似している。柱間寸法については先に記述したとおりであるが、1間幅でもかなりの差をもっており、一単位が何cmであるかを推察することはできなかった。建物の先後関係は不明確であるが以下の点があげられる。

- ・ S B020はS D002に切られている。
- ・ S B020の柱穴出土の小皿はS D002出土の小皿とほぼ同時期のものと思われる。

S B020・S B029・S B041・S B044の柱穴埋土は同様の色調を呈しているが、S B043のも

のはB地区東半部で検出している土壌・ピットの埋土の色調に類似する。

これらのことから考えると、S B 020の営まれた時期はS D 002の時期より前だが、時期差はそれほど大きくなく、S B 029・S B 041・S B 044も比較的近似した時期である可能性が大きいと思われる。S B 043はそれより以前に営まれたものであろう。

溝についてはA地区S D 001とB地区S D 001・S D 002・S D 036は出土遺物もほぼ同時期であり、つながって存在していた可能性が高い。性格については現在のところ不明であるが、遺物の出土状況や溝の規模から考えると区画の役割を兼ねた生活用水路であった可能性も少なくない。

土壌は数多く検出しているが全体的に出土遺物量は比較的少ない。しかしながら、時期的には、底部切離し技法がヘラ切りから糸切りへと移行する時期のものも含まれており、資料としては良好なものといえる。このことは井戸より出土した遺物についてもいえることで、平安末から中世へかけての土器を考える上で興味深い。

また、いわゆる東播系中世須恵器も出土している。

遺跡周辺におけるこの時期の資料も少なく、今後の類例の増加をまって、遺跡の性格・遺物の時期について検討する必要があるだろう。

最後であるが、今回の調査地に南接して白鬚神社^{しらひげ}の分社が存在しており、発掘調査に際して関係資料の出土も期待されたが今回の調査では、神社に関連するような遺構遺物は確認できなかった。しかし、遺跡は神社の境内下にも確実に存在していると思われ、今後の調査の課題となろう。

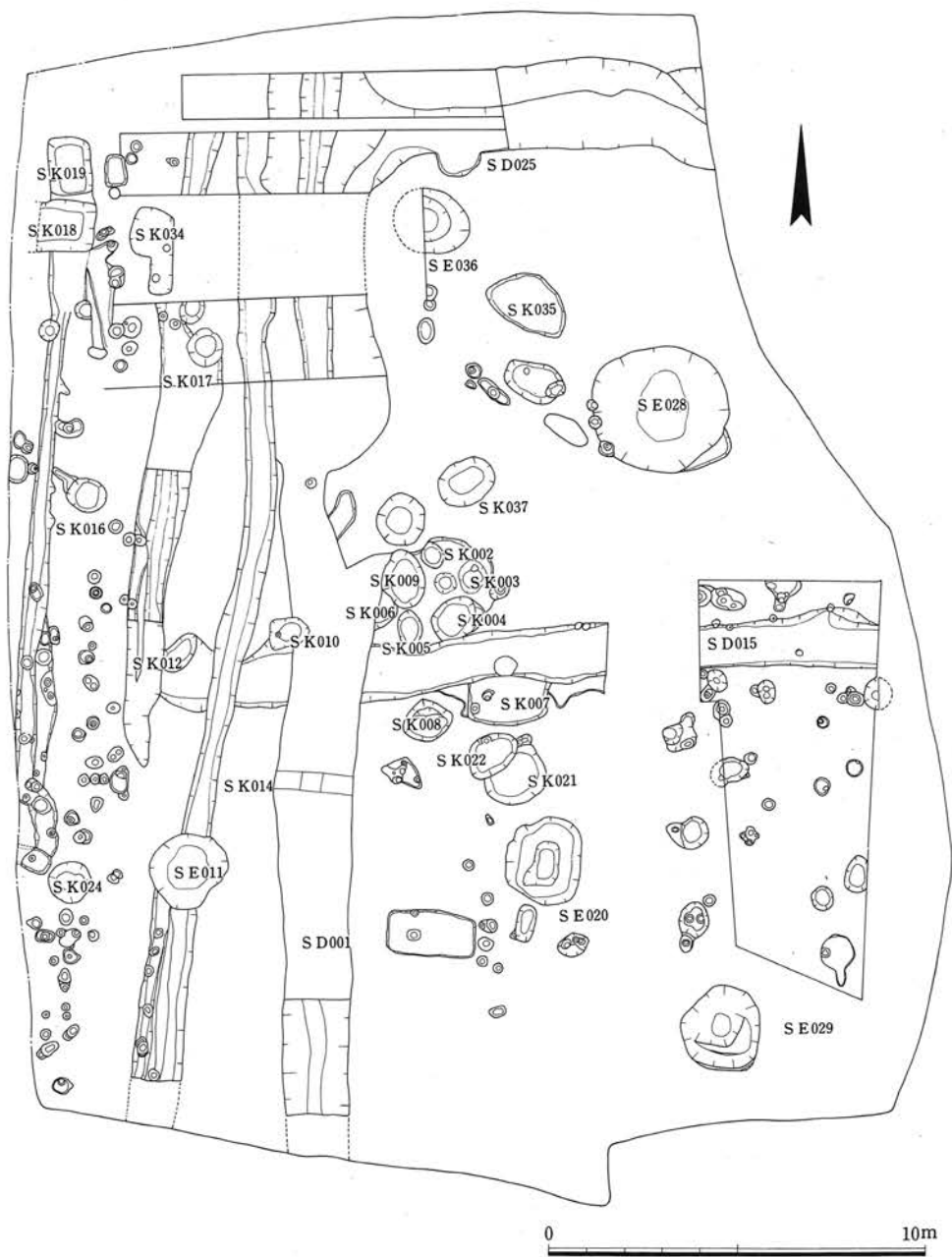


Fig.47 村徳永遺跡A地区遺構配置図 (S = 1/200)

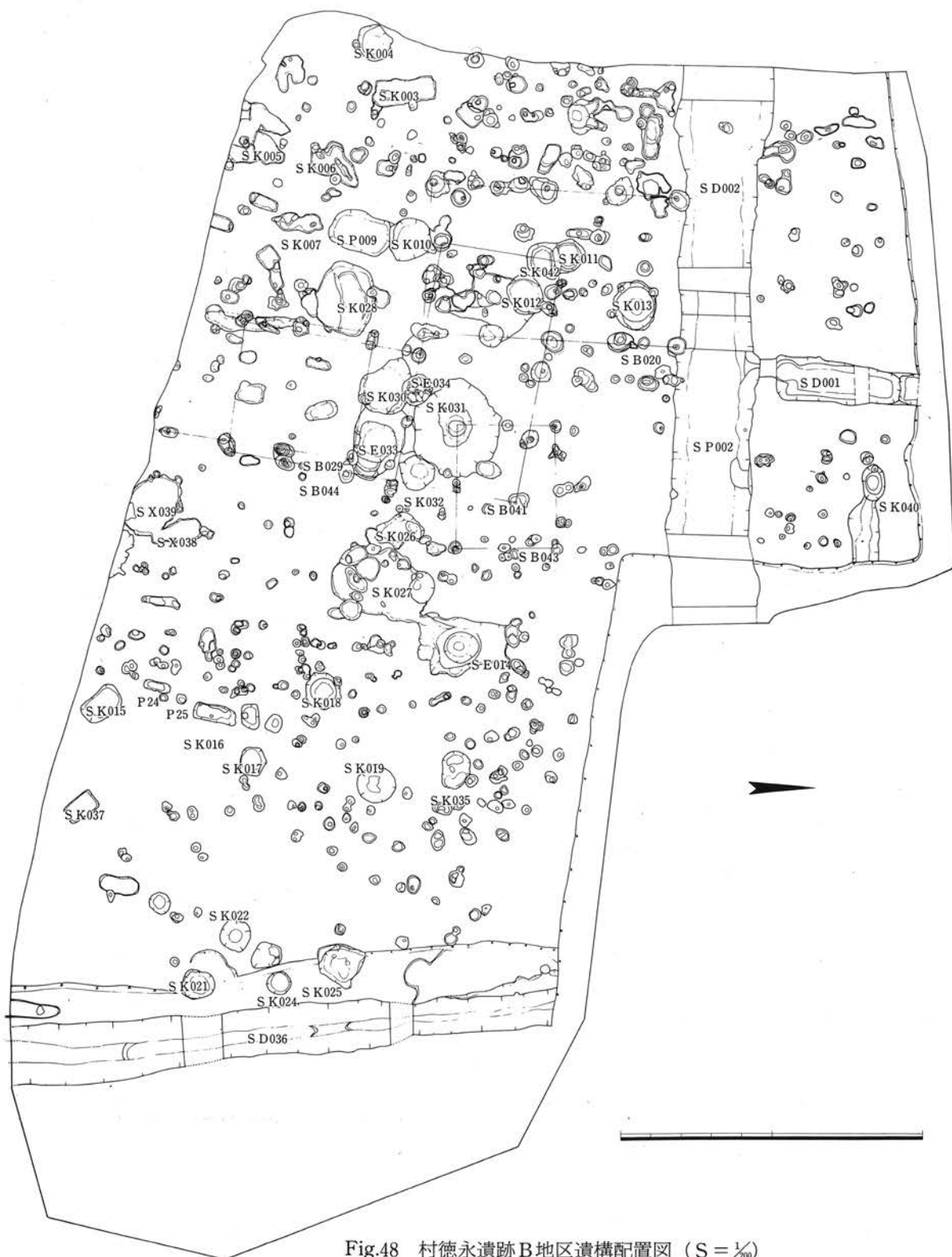


Fig.48 村徳永遺跡B地区遺構配置図 (S = 1/200)

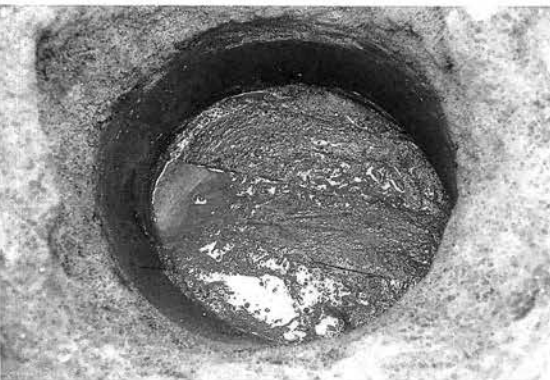
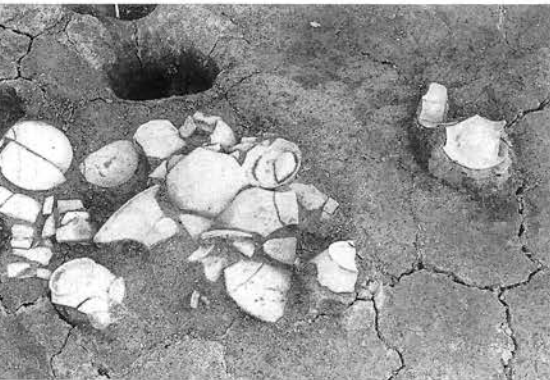
図 版



A地区全景
B地区全景
B地区南西部



B地区 S P 009 (南から)
B地区 S K 025遺物出土状況
B地区 S K 026遺物出土状況



B地区 S B020全景（北から）

B地区 S B029全景（北から）

B地区 S K026遺物出土状況

B地区 S K027遺物出土状況

B地区 S E034井戸枠出土状況



- 9. A地区 S D015
- 11. A地区 S D015
- 19. A地区 S K018
- 21. A地区 S E028
- 22. A地区 S K028
- 32. A地区 S E029

- 37. A地区 S K037
- 40. A地区 S K037
- 68. B地区 S D002
- 69. B地区 S D002
- 74. B地区 S D002



79



106



80



112



91



114



97



135



99



142



103

79. B地区 S P 009

80. B地区 S P 009

91. B地区 S E 014

97. B地区 S K 019

99. B地区 S K 021

103. B地区 S K 025

106. B地区 S K 025

112. B地区 S K 026

114. B地区 S K 026

135. B地区 S X 027

142. B地区 S E 033

佐賀市文化財調査報告書第26集

村徳永遺跡（A・B地区）

平成元年3月31日

発行 佐賀市教育委員会
佐賀市栄町1番1号

印刷 (株) 宮地印刷
佐賀市長瀬町11-20